『男はつらいよ』おぼえがき

髙野敦志



目次

「贋作　男はつらいよ　大阪の寅やん」
「贋作　男はつらいよ　石切慕情」
「贋作　男はつらいよ　寅やん、京都へ行く」
「贋作　男はつらいよ　夕焼けの寅やん」
葛飾柴又帝釈天
「徹子の部屋」に出演した山田洋次監督

205202199196193190

はじめに

今回、山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズ全作を見て、自分が感じたことをエッセイの形でまとめることにした。これは一種の「おぼえがき」であり、映画を見たことがない人にとっては、何の参考にもならないだろう。また、作品の印象を述べるに当たって、どうしてもあらすじに触れざるを得なかった。

いわゆる「ネタバレ」の問題は、作品について論じる場合には、どうしても切り離すことができない。とはいっても、『男はつらいよ』のシリーズでは、余り大きな問題にはならない。久し振りに寅次郎（とらじろう）が柴又（しばまた）に戻ってきて、「とらや」の人たちと大喧嘩（おおげんか）をする。飛び出していった旅先で、出会った女性と恋に

落ちるものの、相手にふられるか、自ら身を引いて失恋というパターンは、多少のバリエーションを示しながらも、大きく変わるところがないのだから。

では、なぜ、『男はつらいよ』のシリーズは人気を保ち続けてきたのか。懐かしい昭和時代の下町の人情、旅先で出会う日本各地の風俗を描いたからとも言われるが、車(くるま)寅次郎という主人公が、堅苦しい日常に縛られないアウトローであるところが大きい。寅次郎のように、他人との衝突を恐れずに本音(ほんね)が言いたい、世間(せけん)の常識などにとらわれずに、自由気ままに生きたいという願望を、誰でも持っているからだろう。

では、車寅次郎という主人公は、どのような形で生まれたの

だろうか。山田洋次監督は『寅さんの教育論』の中で、『男はつらいよ』を構想した経緯(けいい)に関して、寅次郎を演じた渥美清(あつみきよし)の少年時代がヒントになったと述べている。

> 渥美さんは、三日ぐらいにわたって、旅館の部屋でごろごろしながら、いろんな話をしてくれたんです。いわばその話の内容が、「寅さん」という映画の原型となっていると思うんですけれど、それは主として彼の少年時代の思い出話でした。

そこから葛飾(かつしか)柴又、帝釈天(たいしゃくてん)の参道、団子屋に車寅次郎という不良少年といった設定が自然に浮かんできたという。勉強に

ついていけず、授業が分からなくても、渥美少年には学級の生徒の心をなごますという特技があった。一見役に立たないように思えるものでも、必ず存在する意味がある。何でも杓子定規（しゃくしじょうぎ）に扱う平成の世とは異なり、昭和時代には良い意味でのいい加減さもあった。温かく人の成長を見守る余裕もあった。山田監督が渥美清の死をもって、『男はつらいよ』シリーズの製作打ち切りを決意したのも、車寅次郎という主人公の原型が、少年時代の渥美清にあったからである。

　観客は「とらや」の人々を家族のように感じ、封切られるたびに、懐かしい人々との再会を喜ぶ。現実の世界におけるように、寅次郎も中年、初老へと年を重ねていく。妹さくらの息子、

満男（みつお）も幼児から小学生、中高生、大学生、社会人へと成長していく。その間に観客自身も人生を重ねていく。毎回、寅次郎が引き起こす騒動と、恋と失恋というパターンを繰り返しながらも、時の流れというものを、観客の胸に刻んでいったのである。

テレビ版「男はつらいよ」

フジテレビで渥美清が主演するドラマがあり、その一つとして『男はつらいよ』は制作された。最初は「愚兄賢妹」という仮題がついていたが、これでは余りに固すぎるということで、現在のタイトルが選ばれたという。このシリーズは台詞を聞かせ、語るだけで場を持たせることができた俳優、渥美清がいたからこそ成り立った作品だということだ。

フジテレビには、テレビ版の第一回と最終回が保存されており、残っていない他の回も、写真などは保存されており、ＤＶＤにはそれらも収録されている。一九六八年（昭和四三）の制作で、画質は当時の白黒テレビの標準である。

配役に関しては、車寅次郎が渥美清、おいちゃんの竜造（映画版の「りゅうぞう」とは異なり、「たつぞう」）が森川信、舎弟の川又登が津坂匡章、英語教師の坪内散歩が東野英治郎などは、映画版でも引き継がれた。さくらは長山藍子、おばちゃんのつねが杉山とく子、さくらの夫は博士という医師で、井川比佐志が演じていた。映画版では舎弟の源公を演じた佐藤蛾次郎が、テレビ版では寅次郎の異父弟雄二郎として出演している。

テレビ版では妹さくらが、十数年ぶりに帰郷した寅次郎と、満員電車の中で再会するが、さくらは不審な男につけられていると誤解する。「とらや」で再会を喜ぶわけだが、寅次郎は早

速、極道の仲間を「とらや」に呼び込み、どんちゃん騒ぎを起こす。おいちゃんの竜造も悪乗りしているので、おばちゃんのつねに座敷から引きずり出される。杉山とく子のおばちゃんは、三崎千恵子のおばちゃんと比べると、かなり気丈である。

極道の仲間に酌をさせようとすると、さくらは自分は芸者じゃないとして断る。顔を潰された寅次郎は、かっとなって「とらや」を出ていくが、行った先は英語教師の坪内散歩の所である。先生の娘に寅次郎が恋心を描くところや、先生にうなぎを食べさせたいと思いながら、先生が急逝するところなど、映画版の第二作「続・男はつらいよ」に引き継がれている。紛らわしいのは、テレビ版では坪内先生の娘が冬子なのに、映画では坪内夏子に変更されている点、映画版で登場する御前様の姓

も坪内で、娘が坪内冬子であるという点。

では、大きく異なる点はどこかと言えば、おいちゃんとおばちゃんが「とらや」をたたみ、アパート暮らしを始めるところ。「とらや」は喫茶店に変わってしまう。寅次郎は異父弟の雄二郎と、ハブで一儲けしようと奄美大島に出かけるが、逆にハブに噛まれて命を落とす。さくらは寅次郎の死が信じられず、また帰ってくると思っているが、寅次郎の幻を見たことで、寅次郎の死を実感する。この結末に対し、視聴者から多くの抗議の声が寄せられたことが、映画版の制作につながったという。

実際に見たのは第一回と最終回だけだが、映画版と比べると、やはり本格的なドラマというより、笑劇の延長といった感じである。手探りで作っているという印象が強い。「とらや」が

葛飾柴又にあるという感じがしない。寅次郎が各地を旅して、新たな恋人を作るというパターンはまだ確立していない。

第一作「男はつらいよ」

一九六九年（昭和四四）に封切られた山田洋次監督の作品。実は、映画以前にもテレビ番組としても制作されていた。最終回に寅次郎が奄美大島でハブに噛まれて死んでしまったので、それを見た視聴者から、フジテレビに抗議の声が寄せられたという。

テレビ版の人気から映画化の話が出て、第一作として出たのがこの作品である。まさかシリーズ物として、延々と製作されるとは思わなかったので、副題はつけられていない。寅次郎の両親と兄が死んで、たった一人生き残った妹さくらに会いに、寅次郎が二十年ぶりに故郷柴又に戻ってくるところから物語は

始まる。さくら役の倍賞千恵子（ばいしょうちえこ）が、可愛らしい娘なのに驚いた。
第一作ということもあり、寅次郎の出自（しゅつじ）について詳しい説明がある。礼儀正しい挨拶（あいさつ）が始まったかと思いきや、お馴染（なじみ）みのドタバタが始まり、寅次郎はさくらのお見合いをぶちこわす。それがさくらと、印刷工博（ひろし）とを結びつけるきっかけになる。帝釈天を祀（まつ）る題経寺（だいきょうじ）では、庚申講（こうしんこう）の纏（まとい）奉納（ほうのう）をしていたり、紫の衣をつけた御前様（ごぜんさま）が登場したり、寅次郎の恋の相手が御前様の娘冬子である点などは目を引くが、ストーリー展開の原型は、すでに出来上がっている。

第二作「続・男はつらいよ」

山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズの第二作。このシリーズの特徴は、最初に寅次郎が夢を見ること。それが物語の筋と何かしら関わっている。「酔生夢死（すいせいむし）」を地で行っている渡世人（とせいにん）寅次郎の人生を象徴するようだが、夢が現実とずれているところが、またコミカルである。
今回、寅次郎は生みの母、菊（きく）に会いに行く。連れ込み宿を経営する菊に、「金を無心に来たのか」と言われて逆上して飛び出す。ただ、話の中心は英語塾の恩師、坪内先生との再会と、娘の夏子へのほのかな思いである。寅次郎が失恋するのは、このシリーズの既定路線なのだが、それに追い打ちをかけている

のが、恩師坪内先生の死である。こんなに泣いてばかりいる寅次郎も珍しい。

　このままでは、悲しくて陰気な話に終わってしまう。それを和らげてくれるのが、寅次郎失恋後の後日譚である。生みの母にすげなくされ、恩師の死と失恋に傷ついた寅次郎は、突き放した生みの母、菊にもう一度会いに行く。歯に衣を着せぬ物言いは、ミヤコ蝶々がはまり役である。口の悪い者同士本音で話している姿を、新婚旅行中の夏子が見かけるという設定である。世阿弥は『風姿花伝』で陰と陽のバランスの大切さを説いたが、実母と元気よく語らう寅次郎の姿を添えることで、陰に傾きすぎた内容に陽の要素を付け加えているのである。

第三作「男はつらいよ　フーテンの寅」

極道の寅次郎は、散々周囲をひっかき回す。自分は幸せになれないけれども、人間にとって何が大切かは分かっていて、困っている男女がいると、仲を取り持つ役を買って出る。いわゆるトリックスターという存在で、沈滞した世間を混乱させることで、本来あるべき姿を思い出させてくれるのである。

　今回、寅次郎に見合いの話が出る。ところが、相手の駒子という女は古くからの知り合いで、浮気した男への腹癒せのために、お見合いを申し出ただけだった。寅次郎は駒子と相手の男の仲を取り持つまではよかったが、仕出し弁当に酒、芸者にハイヤーまで呼んで祝宴を開く。費用はすべて「とらや」持ちと

言い出して、おいちゃん夫婦と大げんかして飛び出す。柴又を飛び出さないと、寅次郎の物語は進展しない。

湯の山温泉の古い旅館で、番頭（ばんとう）として寅次郎は働くようになる。女将（おかみ）がきれいな未亡人お志津（しづ）だったからである。寅次郎はお志津に一目惚（ひとめぼ）れするが、どうなるかは毎度の定番である。今回新鮮だった手法としては、失恋した寅次郎が、初詣(はつもうで)の中継に登場して、「とらや」の人たちをびっくりさせるという設定である。そこでも、寅次郎はお志津の名前を口にしていた。懲（こ）りない男である。

時に一九七〇年(昭和四五)。貧しい父を助けるために、娘が妾奉公（めかけぼうこう）に出る話が出てくる。確かにまだ日本は貧しかった。バスが大人三十円、子供十五円の時代。三十円のコーヒー牛乳

がごちそうで、いつも母にねだっていたものである。

第四作「新・男はつらいよ」

山田洋次の『男はつらいよ』は、寅次郎が引き起こす騒動と、寅次郎のかなわぬ恋という構成が定番だが、今回は前半のドタバタ劇に力が入っている。競馬で大当たりを取った寅次郎が、世話になったおいちゃん、おばちゃんとハワイ旅行することを計画する。

ところが、旅行会社の社長に金を持ち逃げされる。「とらや」の一行がハワイ旅行することは、町内の評判になっていたから、三人は日が暮れてからこっそり「とらや」に戻る。そこに泥棒が入ってきたから、警察に突き出すとハワイに行っていないことがばれてしまう。そこで、口封じに「泥棒に追い銭」の羽目

に陥る。結局、警官に捕まった泥棒が「とらや」に逃げ込み、面目丸つぶれになって大げんかが始まる。

後半の恋物語は、結構あっけない。空いていた寅次郎の部屋に、春子という幼稚園の先生が下宿する。一部屋だけ借りて、賄（まかな）い付きなんてスタイルは、昭和四十年代によくあったが、親類でもない者と同居することには、今の日本人には抵抗があるだろう。外国人をホームステイさせるという習慣は残っているが。

心の傷ついた春子を、寅次郎は必死に慰めようとするが、春子には恋人がいたことが判明し、寅次郎の一方的な片思いは終わる。作品の中で佐良直美（さがらなおみ）の「世界は二人のために」が流れていた。そういえば、自分が小学生の頃にはやっていたのを思い出した。

第五作「男はつらいよ　望郷篇」

冒頭で寅次郎は夢を見る。世話になったおいちゃんが危篤（きとく）となった夢を。「お兄ちゃん、泣かないで」とさくらが言っているのが、「お客さん、そんなところで寝ていると風邪（かぜ）引くよ」という仲居（なかい）さんの声に変わる。これを虫の知らせかと思って、寅次郎は「とらや」に電話する。「息をしているだけだよ」というおばちゃんの冗談を真（ま）に受けた寅次郎は、御前様や近所の人においちゃんが危篤だと話し、挙げ句の果てに葬儀屋まで呼んでしまう。

これが落語で言えば「枕」の部分である。それが連想を誘うように、竜岡（たつおか）親分の危篤の知らせが入る。札幌に飛んだ寅次郎

は、親分がまだ見ぬ息子に一目会いたいと言って涙を流すのを聞く。探し当てた息子の説得もままならぬまま、親分の死を知った寅次郎は、人生の無常を感じて、汗水流して働くことの大切さを悟る。

寅次郎が働き始めたのは、まだ漁師町だった頃の浦安（うらやす）である。豆腐屋で仕事に精を出す寅次郎だったが、娘の節子（せつこ）に心引かれたからだった。節子に「ずっとここにいてほしい」と言われた寅次郎は、これをプロポーズだと早合点（はやがてん）する。実は節子には恋人がおり、結婚して高崎に引っ越すので、母親の店を寅次郎に手伝っていてもらいたかったのだ。真っ当な生き方をしようとして、失恋するいつもの顛末（てんまつ）である。

節子を演じたのは、テレビ版でさくら役だった長山藍子、母

親役を演じたのは、テレビ版では「とらや」のおばちゃんだった杉山とく子である。当初は本作をもって『男はつらいよ』シリーズは打ち切りになるはずだったが、余りに好評だったために続篇が制作されることになる。

第六作「男はつらいよ　純情篇」

冒頭でテレビが「ふるさとの川　江戸川」という番組を流している。そこに映し出されたのは、柴又帝釈天の題経寺と御前様、次いで「とらや」のおいちゃん、おばちゃん、妹さくらである。望郷の念にさいなまれ、寅次郎は「とらや」に電話をかける。今までは柴又から電話をかけることが多かったが、今回は旅先の山口で、これから長崎の五島（ごとう）に向かうところだった。

　寅次郎は旅先で子連れの女と出会い、女のふるさと、五島の実家に向かう。父親と娘の語らいを聞くうちに、寅次郎は「帰るところがあると思うからいけない」と悟る。悟りながらも望郷の念に負けて、柴又に舞い戻る。

その頃、「とらや」には遠縁(とおえん)の女夕子(ゆうこ)が間借りしていた。夕子に対する好意と、さくらの夫、博の独立問題がからまってくる。印刷工場の社長との対立も収まり、社長は工員らと博、さくらを誘って川下りを催(もよお)す。「木曽(きそ)の御嶽山(おんたけさん)」と謡(うた)いながら、舟下りしているのは江戸川である。

夕子の夫が現れて、寅次郎の片思いも終わる。毎度のごとく恋破れて、また旅に出る。もう帰ってこないと思いながら、帰ってくるのは、これで最後と思いながら、制作されていった『男はつらいよ』のシリーズと同じである。

第七作「男はつらいよ　奮闘篇」

第二作「続・男はつらいよ」で登場した生母菊が、「とらや」を訪ねてくる。葉書で寅次郎が結婚すると言ってよこしたので、顔を見たくなったのだという。しかし、寅次郎が失恋の連続であるのを知って、再会したばかりの二人は言い合いとなる。売り言葉に買い言葉で、寅次郎は嫁さんを探しにいくと言って飛び出してしまう。

寅次郎は青森の津軽(つがる)から集団就職で上京しながら、紡績工場から飛び出した娘、花子と出会う。花子は知的障害者だが、麗(うるわ)しい声で歌う美少女である。寅次郎は花子の就職先を探し、結局「とらや」で働かせることで落ち着く。

今回は知的障害者の少女がヒロインという点が変わっている。困っている少女を哀れんで、人助けしているつもりだったのだが、寅次郎の好意を喜んだ花子は、「お嫁さんになりたい」と言い出す。それを真に受けた寅次郎は、有頂天になるわけだが。本当は好意を寄せているに過ぎないことがうかがえる。素朴な形でしか思いを表現できない少女と、天真爛漫な寅次郎のコントラストがコミカルである。

　中学や高校を卒業すると、東北の貧しい農村から、大量の子供たちが集団就職で上京した時代。冬の間は農作業ができない一家の大黒柱も、大都市の工事現場に出稼ぎ労働者として出て行った。一九七〇年代はいまだに地域格差の大きい時代だった。東北出身の若者でも、方言丸出しだったのは、遠い過去の時代

となった。

第八作「男はつらいよ　寅次郎恋歌」

このシリーズの中で「寅次郎恋歌」を見たのは、これで何回目だろうか。日本語教育の教材にシナリオの一部が載っていて、読解の後に学生と見たものである。借りてきたＤＶＤでは、日本語の字幕も表示できるので、江戸弁の早口でも、上級レベルの外国人学生なら理解できた。ユーモアとペーソスは、世界共通の感覚である。

今回は妹さくらの夫、博の母が危篤になる。葬儀の場面に現れた寅次郎は、妻に先立たれた博の父としばらく過ごし、人間の本当の生活とは何か、運命に逆らわない生き方こそ、幸せな生活ではないかと諭（さと）される。その場面に現れる竜胆（りんどう）の花が、寅

次郎の求めて得られぬ幸せの象徴として繰り返し出てくる。

今回、寅次郎が引かれるのは、柴又に喫茶店を開いた未亡人の貴子（たかこ）である。内気な少年学（まなぶ）と遊んでやることで、寅次郎は頼もしい人として貴子の目に映る。旅をしながらの人生を夢に抱（いだ）き、寅さんと一緒に行ってしまいたいとまで洩（も）らす。

以前までの回とはちょっと空気が異なる。母子家庭の問題を抱（かか）え、女手（おんなで）一つで必死に子育てする姿が、単に色気のあるだけのヒロインにはない、ひたむきな印象を与える。初めて寅次郎の生き方に理解を示してくれる女性が現れたのである。とはいえ、このまま家庭を持ってしまったら、寅次郎の旅がらすの生活は終わる。貴子に思いを寄せられたまま、美しい思い出として胸にしまい、木枯（こが）らしの吹く夜に柴又を発（た）っていく。このシ

リーズの中で、趣（おもむき）の深い作品の一つとして印象に残っている。

第九作「男はつらいよ　柴又慕情」

またもや夢から始まる。さくらと博がヤクザの取り立てに遭（あ）い、蒲団まで剥（は）がされていくところを、寅次郎が助けるという場面から。不吉な夢が気になって柴又に戻ってくると、「とらや」の二階は「貸間」になっていた。さくらと博の夫婦が一軒家を建てるための資金にと、寅次郎の部屋を貸し出したからだった。そこに寅次郎が戻ってきて一悶着（ひともんちゃく）。啖呵（たんか）を切って「とらや」を飛び出したのだが、不動産屋に紹介された部屋が、実は「とらや」だったという落ちがついている。

今回からおいちゃん役は、森川信から松村達雄（まつむらたつお）に代わった。第八作の撮影後に急逝（きゅうせい）したからだった。味のある演技だった

のが惜しまれる。二代目のおいちゃん松村達雄は、第六作で女好きの藪医者（やぶいしゃ）役で登場したから、そのイメージが頭について離れない。

柴又を飛び出した寅次郎は、金沢（かなざわ）で旅する三人の女たちと出会う。その中の一人歌子（うたこ）は、気難しい小説家の父を持つ娘だった。柴又で再会した寅次郎を頼もしく思う歌子だが、陶工の青年との結婚を父に反対されていたのだった。寅次郎は毎度のように、「いい人」を演じながら失恋する。

実は、僕は中学生の頃、初めて『男はつらいよ』のシリーズを見たのだが、何作目であるかはずっと分からなかった。旅する女たちと寅次郎の、出会いと交歓（こうかん）を、シュトラウスの「ウィーンの森の物語」や「春の声」のバック・ミュージックで表現

する場面を見て、子供の頃に見たのはこれだと思い出した。

今回のヒロイン歌子役は、吉永小百合（よしながさゆり）が演じている。実に可憐で美しいと思った。中学生の頃、好きだった女優の一人で、初老となった今でも、内面の美しさを感じさせる。早稲田大学の仏文科の恩師が、実は学生時代の吉永小百合を教えたという話を聞いた。授業に参加する日は、ファンが集まって大変だったらしいが、本当によくできる学生だったとのこと。才色兼備（さいしょくけんび）の女優は、いつの時代でも貴重な存在である。

第一〇作「男はつらいよ　寅次郎夢枕」

改心した寅次郎に、見合い相手を探すことになったが、フーテンの寅だと聞けば、ふざけんじゃないと、先方が怒り出すのが落ち。みんなに馬鹿にされたとむくれた寅次郎は、「とらや」の人たちと大喧嘩して飛び出した。

やがて、「とらや」の二階に、御前様の甥で東大助教授の岡倉が引っ越してきた。二階でワーグナーを聴いたり、勉強の邪魔になるから静かにしてくれと言うインテリは、「とらや」のようなにぎやかな家には、最もふさわしくないタイプである。演じているのは米倉斉加年。下宿する習慣がなくなった現在では、こうした設定でドラマは組めなくなったが。

そこに寅次郎の幼友達、千代が姿を現す。離婚して息子とも会えない千代を、寅次郎は慰めたいと思う。その千代に岡倉が一目惚れする。二人の仲を取り持ちたいと奔走する寅次郎だが、千代が好きなのは寅次郎の方だった。

寅次郎の方でも満更ではなかったようだが、岡倉との仲を取り持とうとした立場から、千代の思いを受け容れることはできなかった。こうして寅次郎は、自ら結婚の機会を逃すのだった。

この作品で気になったのは、助教授の岡倉の描写である。大学の教師と言えば、小難しいことばかり考えていて、世間知らずの変人で、何かあれば狂人と紙一重の状態になるというステレオタイプの描き方である。まあ、東京大学の先生は知らないが、現実の大学教師はこんなもんじゃない。男女の道に疎(4s)

いというのも嘘である。もっと人間くさくて、どろどろした物を持っている。

第一一作「男はつらいよ　寅次郎忘れな草」

　寅次郎とさくらの父の二十七回忌の法事をやっているところに、寅次郎がひょっこり現れる。御前様が読経（どきょう）している最中に、つまらぬいたずらをして、「とらや」の人たちを爆笑させ、法事を台無しにしてしまう。ちょっと気になったのは、御前様が『般若心経（はんにゃしんぎょう）』を唱（とな）えていたことだ。柴又帝釈天の題経寺は日蓮宗（にちれんしゅう）の寺院だから、『法華経（ほけきょう）』以外の経典（きょうてん）を唱えることはない。玉に瑕（きず）なので、ちょっと残念な気がした。

　喧嘩して飛び出した寅次郎は、網走（あばしり）で売れない歌手リリーと出会う。一見あばずれといった風体（ふうてい）の女で、旅をしながらあちこちのキャバレーで、酔っ払いを前にして歌っている。歌うこ

とが好きで、夢を見ながら生きているが、現実にはつらいことが多い。夜汽車（よぎしゃ）の窓に明かりがともっていると、そこには平凡ながらも幸せな生活があるんだとつい涙が出てしまう。フーテンの寅さんの女版みたいなリリーである。たちまち二人は意気投合してしまう。

　酪農家に住み込みで働き、堅気（かたぎ）に生きようとした寅次郎だが、熱射病に倒れて柴又に戻る。そこにリリーが現れる。寅次郎の女性遍歴（へんれき）について、「とらや」の人たちが話していると、リリーは「初恋の相手は寅さんだ」と言い出す。「とらや」の人たちの温かいもてなしに、リリーは感動するのだが、根はいい女でも寅さんの女版である。つらい出来事があった夜、泥酔して「とらや」を訪れ大騒ぎ、なだめる寅次郎に「話を聞いてくれ

ない」と啖呵を切って飛び出していく。寅次郎がふだんやってきたことである。

　リリーは歌手をやめて、寿司屋の女房の座に落ち着くが、本当は寅さんの方が好きだったとさくらに洩らす。浅丘ルリ子が演じるリリー、寅次郎との相性が抜群な女歌手は、その後も寅次郎と関わっていくことになる。

第一二作「男はつらいよ　私の寅さん」

「とらや」のおいちゃん、おばちゃんに感謝の意味で、さくらと博は九州旅行を計画する。旅立つ前日に寅次郎が帰ってくる。隠し立てされたことにへそを曲げるわけだが、さくらに説得されて留守番を引き受ける。

普段は旅がらすの寅次郎だが、道中の安全を思ってやきもきする。おいちゃんたちが帰ってくるときは、ご飯を作って風呂を沸かして待っている。立場がすっかり逆転している。寅次郎らしくない善人ぶりである。

そこに寅次郎の旧友文彦（ふみひこ）が現れる。文彦の妹りつ子の家に上がり込んだ寅次郎は、酔ってりつ子のキャンバスを汚してしま

う。何てひどいことをと、りつ子はすごい剣幕である。寅次郎とりつ子の出会いも、典型とはかなり異なっている。

ところが、先日は失礼なことをしたと、りつ子の方から「とらや」に謝りに来る。りつ子の笑顔に、寅次郎はまた一目惚れしてしまう。ここでようやく、いつものパターンに入る。寅次郎に好感を持つりつ子だったが、それはあくまで友達としてだった。

結婚よりも画家として生きていきたい、いつまでもいい友達でいましょうと言われたら、それが相手の本心であっても、今まで通りに付き合っていくのは難しい。気持ちをすぐに切り換えられないところが、ドライになりきれないところが日本人らしい。寅次郎はつらくなり、旅がらすの生活に戻っていく。

りつ子を演じたのは岸惠子（きしけいこ）である。フランス人の映画監督イヴ・シャンピと結婚し、パリで生活しながら、サルトル、マルロー、コクトーらの文人と親交を結び、娘ももうけたが、この作品が撮影された二年後の一九七五年、離婚するに至った。文筆家（ぶんぴつか）としても知られる。センテンスの長い、流麗（りゅうれい）な文を書く。「ああ西洋、人情うすき紙風船」を外国人の学生に読ませたら、読解に苦労していた。プルーストの原文を日本人が読まされたように。

第一三作「男はつらいよ　寅次郎恋やつれ」

寅次郎が結婚したいと思っている絹代（きぬよ）は、二人の子供を抱えて無我夢中で働く女性だった。引き合わせに温泉津（ゆのつ）にさくらを連れていった寅次郎だが、出奔（しゅっぽん）したままだった絹代の亭主はすでに戻ってきていた。しょっぱなから失恋というわけである。

今回の特色は、ヒロインが再出演したという点にある。「男はつらいよ　柴又慕情」で登場した歌子である。気難しい小説家の父の反対を押し切って、陶工の青年と結婚した歌子だったが、すでに夫を亡くして、津和野（つわの）にある亡夫の家で意地の悪い姑（しゅうとめ）・小姑（こじゅうと）との生活を余儀（よぎ）なくされていた。

寅次郎と再会したことで、東京に戻る決心がついた歌子は、

柴又の「とらや」を訪ねてくる。夫を亡くした哀しみと、気難しい父に心が開けない思い、仕事を探す悩みを抱えた歌子を、何とかしてやりたいと思う寅次郎。恋愛という感じではなく、年下の女性をいたわる兄という立場がほほえましい。

　歌子は父と和解し、伊豆大島の職場で保母の見習いとして働くようになる。優しく見守ってきた歌子が自立したことで、寅次郎の役目は終わった。そして、毎度のように夜遅く、そっと「とらや」を出て行く。旅がらすのついでに温泉津に寄り、夫と幸せそうに暮らす絹代と再会して幕が下りる。

　この作品については賛否両論があるようだ。「男はつらいよ　柴又慕情」の続篇である本篇を制作したのは、前作で表現し

きれないものがあったからかという点である。前作を制作した段階では、歌子は陶工と結婚し、幸せな人生を歩み出すところで終わっている。それなのに、人気女優の吉永小百合を再登場させるために、歌子の幸せが奪われる設定がなされたのではないか、という憶測も可能だからだ。

　僕自身の感想としては、たとえそうした意図があったとしても、哀しみに沈む歌子の姿が切々と描かれた点や、前作では未解決だった歌子と父との和解もなされたという点で、少なからず心を動かされたので、続篇としては成功していると思われる。

第一四作「男はつらいよ　寅次郎子守唄」

『男はつらいよ』のシリーズで、おいちゃん車竜造は、配役が二度代わっている。初代の森川信は、寅次郎の叔父らしく、江戸っ子ならではの啖呵の切り方が堂に入っていた。気が短いところなども、血のつながりを感じさせるほどの名演技だったが、惜しくも病没により降板した。

　二代目のおいちゃんは、松村達雄だった。このおいちゃんがなぜ降板したかは、よく知られていない。僕自身、最初においちゃんとして登場したときは、女好きの藪医者役のイメージが強くて、どうかなと感じたのだが、さすがは名優、次作からはすっかり打ち解けた雰囲気になっていた。それなのにどうして

と思っていた。実は、松村自身も降板する意思はなかったという。しばらく続篇の制作はないという話を聞いて、盲腸の手術をすることにしたのに、続篇の制作が決まってしまい、やむなく代役を立てることになったらしい。その話を聞いて松村は激怒したという。

　三代目の下條正巳は、最初は固辞するつもりだったらしいが、息子の下條アトムに勧められて引き受けることにしたという。最終作まで下條がおいちゃん役を演じたため、途中から『男はつらいよ』のシリーズを見た観客にとっては、下條がおいちゃんだというイメージが定着した。おいちゃんとしての演技を見るのは、初めてではなかったためかもしれないが、頑固親父で口数が少ない、いかにも昭和時代の父親の雰囲気で、すっかり

竜造役にはまっていた。

今回の作品で目を引く点は、旅先の唐津で他人に押しつけられた赤ん坊を、おんぶ紐（ひも）で背負った姿で寅次郎が現れ、「寅さんには子供がいた」という噂が柴又の町に広まってしまった点である。

おんぶ紐というのは、格好が悪いと思われているためか、ベビーカーがはやっているためか、すっかりすたれてしまった。ただ、おんぶ紐で背負われて育つことで、子供は母親に対する絶対的な信頼を抱くとともに、母親の働く姿を物心つく前から見せられ、いろいろな人と出会うことで、社会性の基礎を身に着けるという。今はすたれてしまった日本式の育児法である。

いま一つは、さくらの夫、博が仕事で腕にけがをした点。

それが縁で看護婦の京子（きょうこ）と知り合うことになる。寅次郎はいつものように京子に引かれるわけだが、京子の参加しているコーラスグループのリーダー弥太郎（やたろう）が、京子に恋しているのを知って、告白をするように促すのである。それが実を結ぶことで、寅次郎はまたもや失恋し、柴又をあとにすることになる。

第一五作「男はつらいよ　寅次郎相合い傘」

「寅次郎忘れな草」のヒロイン、リリーの再登場である。リリーは寿司屋の亭主と別れて、以前と同じように、酒場で歌をうたって生活している。寅さんの女版のような性格だから、堅気な生活には向いていないのである。

　寅次郎は青森で兵藤（ひょうどう）という男と旅をしている。この男は自由を求めて家出してきたのだった。演じているのは船越英二（ふなこしえいじ）。僕が初めて船越を見たのは、朝ドラ『雲のじゅうたん』に登場する夢見るお殿様。兵藤のような男には適役である。そこに偶然、リリーが現れて、三人は世間のしがらみから逃れた生活を送る。駅舎で夜を過ごしたりは、若者でなければなかなかでき

ない。

　日本がまだ希望に満ちていた頃、モラトリアムという言葉が流行していた。本来は金融の用語で「支払猶予」を意味するのだが、学校を卒業して社会人となるべき若者が、しばらく就職するのを猶予してもらって、旅をしたりしながら、自分とは何か考えたりすることを指した。親の方でもそれを許せる経済的な余裕があった。

　ところが、寅次郎やリリーは、もう中年なのに定職に就（つ）かず、気ままな生活を送っている。兵藤という男も、そうした自由に憧れて家出したわけで、大人になりきれない人間なのである。ただ、寅次郎と兵藤、リリーとでは異なる点もある。男はいつまでも甘い夢を見ているが、女は夢を見ながらも、現実を厳し

く見つめる目も持っている。甘ったれた男なんか見ていられない。そこで、リリーは寅次郎と衝突するのである。
「とらや」の人たちは、相性が抜群のリリーと寅次郎の結婚を願い、リリーもそれを承諾（しょうだく）する。ところが、寅次郎はリリーが冗談を言っていると思い込む。すると、勝ち気なリリーは冗談だと偽って、「とらや」を飛び出してしまう。一箇所（いっかしょ）に留まれない渡り鳥なので、どんなに相性が良くても、二人で一緒に暮らすというのはどだい無理な話だと、寅次郎も悟っているのである。

第一六話「男はつらいよ　葛飾立志篇」

　冒頭で順子（じゅんこ）という女子高校生が現れ、寅次郎を父親と勘違いする。せっかく往年のアイドル、桜田淳子（さくらだじゅんこ）を登場させたのに、その後は寅次郎と再会することもなく、手紙のやりとりで終わる。順子の母お雪のことも通り一遍の説明だけで、どうして父親と勘違いした話を持ち出したのか理解できない。
　寅次郎はお雪の墓参りで、住職から学問の大切さを教えられる。柴又の「とらや」には、御前様の親戚で考古学を専攻する礼子が下宿している。学問をしたいという寅次郎に対し、歴史の家庭教師を始める。今回は礼子が寅次郎の恋する相手というわけである。

そこに、礼子の師である田所（たどころ）先生が登場する。演じているのは小林桂樹（こばやしけいじゅ）。僕の頭の中では、小石川養生所（こいしかわようじょうしょ）を舞台とした時代劇『赤ひげ』に登場する医師、新出去定（にいできょじょう）のイメージなのだが。大学教師田所の描写が、ステレオタイプである点では、「寅次郎夢枕」における岡倉の場合と同様である。ちなみに、岡倉を演じた米倉斉加年が、今回は警官役としてたびたび現れるのも気になった。

田所先生も変人として描かれ、団子を食べながら煙草を吸い、身なり構わぬ風体で、酔ってオペラの歌などうたっているが、恋愛の道には縁遠い。寅次郎に教えられて愛弟子（まなでし）の礼子への愛に目覚めるが、礼子に断られて寅次郎と旅をするところで幕が下りる。

何で学者を登場させると、こうもステレオタイプになってしまうのか。庶民から見た学者のイメージをなぞっているからなのか。喜劇だから必ずしもリアリズムは要求されないというのだろうか。

第一七話「男はつらいよ　寅次郎夕焼け小焼け」

古い時代には、文人や画家が手持ちの金を持たないときは、世話になった礼として書画を置いていったという。それが大家(たいか)の手による物だと分かって、大騒ぎになるという話である。文人や画家は身なりに構わず、自由人で世間の常識なんかどうとも思っていない。今回登場する画家池ノ内青観(いけのうちせいかん)も、そうした人間である。

昭和時代にはまだ、封建時代の遺風が残っていた。血筋がどうだの、あの方は世が世ならお殿様だったのだの、結婚するのに家柄が違いすぎるとか、そんなこと気にする人間がたくさんいた。現代人から見たらつまらないこだわりだが、自由な空気

の中にも古い価値観として残っていた。明治生まれの老人が、まだ活躍していた時代である。

寅次郎は酒場で青観と知り合い、気の毒な老人だと思って「とらや」に泊まらせる。ところが、青観は宿屋と勘違いして、「とらや」の人たちに厚かましい態度を取り続ける。それが誤解だと分かったとき、ささっと描いた絵を礼として渡す。それが七万円で売れたので、青観が大家の先生だということが分かるのである。

青観のお供をして、播州龍野(ばんしゅうたつの)を旅した寅次郎は、芸者のぼたんと意気投合する。その後、上京したぼたんから、金を騙し取られたことを聞いた寅次郎は、一肌脱ぎたいと走り回ることになる。今までにない話の展開を楽しませてもらったが、それ

は配役が素晴らしかったからでもある。画家の青観を演じたのが宇野重吉（うのじゅうきち）。こんな深みのある、内面が表情に出ている俳優は少なくなった。

一方、ぼたんを演じた太地喜和子（たいちきわこ）は、歌麿（うたまろ）の浮世絵に出てくるような美人、江戸情緒（じょうちょ）を感じさせる女優だったが、深夜に車が桟橋（さんばし）から落ちるという事故に巻き込まれ、五十を前にして亡くなった。逸材（いつざい）が失われたことを、しばらく悔やんだものである。

第一八話「男はつらいよ　寅次郎純情詩集」

さくらと博の息子、満男の学校の産休補助教員雅子（まさこ）先生が、「とらや」に家庭訪問にやって来る。そこに居合わせた寅次郎が演説をぶったせいで、さくらと博はほとんど相談できずに終わる、それを「とらや」の人たちになじられ、寅次郎はいつものように飛び出していく。

旅先で一座の役者に景気よくごちそうした寅次郎は、代金が払えず無銭飲食で警察の厄介（やっかい）になる。さくらが身元引受人として信濃（しなの）の別所温泉に迎えに行く羽目となる。男は見栄（みえ）で生きているようなもので、見栄を張れるうちがまだ花だが、財布と相談せずに行うところがフーテンの寅である。

「とらや」を再訪した雅子先生に、寅次郎が鼻の下を長くしているので、さくらは雅子先生が寅次郎の娘ほどの年で、相手にふさわしいのは雅子先生のお母さんぐらいの年の人だと諭す。そこに、雅子先生の母、綾（あや）が現れる。三年も入院生活を送っていた綾は、ぜひ遊びに来てほしいと寅次郎に語る。寅次郎の思いは雅子先生から、綾の方に移る。しばしば屋敷を訪問して、病弱な綾を楽しませたり、ピクニックに連れ出したりする。
ただ、綾は快癒（かいゆ）して戻ってきたのではなく、医者にさじを投げられて、人生の最期（さいご）を楽しむために退院したのだった。綾は寅次郎を慕いながら命を落とす。寅次郎の好きになった女性が亡くなるのは、『男はつらいよ』のシリーズで初めてである。
寅次郎に身を固められては、次の作品が生まれないわけで、寅

次郎は失恋するように運命づけられている。死別というちょっと悲しい結末も、失恋のバリエーションとして選ばれたものである。
ちなみに、母の綾を演じたのは京マチ子である。『男はつらいよ』のシリーズで唯一、寅次郎を演じる渥美清より年上のヒロインだった。一方、娘の雅子先生を演じたのは檀ふみである。テレビで初めて見たのは、ＮＨＫで放送された「連想ゲーム」でだった。勘の鋭い才媛（さいえん）という印象だったが、それもそのはず、作家檀一雄（だんかずお）の長女である。父親がパリで放浪している間、極度の貧困で鶏の餌を食べたらしい。どんな経験でも、それをプラスに転換するのは、作家も女優も同じなのではないか。

第一九作「男はつらいよ　寅次郎と殿様」

このシリーズの冒頭は、寅次郎の夢で始まる。映画制作に関わったスタッフが、毎度趣向を凝らした小劇を披露(ひろう)する。それを見ていて、『紅白歌合戦』に出演する歌手が演じる劇を思い出した。ストーリーがどうかと言うより、誰がどの役を演じているかに、観客の関心が向いているからである。

今回、寅次郎は「鞍馬天狗(あんばてんぐ)」を演じている。この夢は本筋と関わりがある。寅次郎が伊予大洲(いよおおず)で出会う旧大洲藩の殿様は、嵐寛寿郎(あらしかんじゅうろう)が演じている。映画『鞍馬天狗』の俳優であり、サムライの言葉遣いをさせるには、持って来いの配役となっている。

末の息子の結婚に反対し、勘当(かんどう)した息子の亡き後、ぜひ息子の嫁に会って礼を言いたいという殿様の願いを、安請け合いした寅次郎が、息子の嫁鞠子(まりこ)を探して奔走するという話である。

華族(かぞく)制度がなくなっても、元の殿様が在世していた昭和の後期、家柄や身分の違いを気にする日本人が多かった。その一方で、相手の気持ちを察することが美徳とされ、人の話を聞いたり、ドラマを見たりしてもらい泣きする人も多かった。他人に対する思いやりが残っていて、無関心と冷血さが横行(おうこう)する現代と比べたら、別の国のドラマでも見ている気分になる。

殿様は嫁の鞠子に、大洲に来て自分と一緒に暮らしてほしいと願う。しかも、寅次郎と再婚してほしいとまで思う。殿様の勝手な願望が、鞠子の気持ちとは無関係に、「とらや」の人た

ちの心を揺さぶる。現代だったら、老人の妄想だとして、ハナから無視されるだけなのに。

第二〇作「男はつらいよ　寅次郎頑張れ！」

「とらや」の二階に、電気工事作業員の良介（りょうすけ）が下宿している。店先に現れた寅次郎を押し売りと間違え、ドタバタ劇が始まる。今回の作品は、昭和時代の雰囲気に満ちている。下宿人を置くなんて、ほとんどしなくなったし、押し売りも珍しくなった。歯ブラシや石鹸を一つ千円で売りつけても、警察に捕まる危険を考えたら、割に合わないからである。

　そもそも、寅次郎がやってるテキ屋の口上（こうじょう）も、とんと見かけなくなった。あれは一種の演芸で、口車に乗せられ売りつけられても、大して損した気はしなかったものだ。若者同士のぎこちなくて純情な恋愛も、今の風俗からは消えてしまった。初

めてのデートで、いきなり告白なんかしないし、ましてやふられたと誤解して自殺などしない。携帯電話やメールを使えばいいだけの話である。

　ふられたと誤解した良介は、二階でガス自殺を図る。下宿先でそんなことするのは人でなし。下手したら、「とらや」の建物全体を吹き飛ばして、おいちゃんおばちゃんもあの世逝(ゆ)き、二階だけ壊れるなんてうまくいくもんじゃない。まあ、喜劇なんだからリアリズムであれこれ言ってもしかたがないが。

　故郷の平戸島(ひらどしま)に戻った良介を、寅次郎は心配して訪ねていく。そこで、良介の姉、藤子に心を引かれる。両親を亡くした姉が弟を母親代わりに面倒を見るなんていうのも、年が離れた姉弟でなければ成り立たない。これもまた、昭和時代を知らなければ、

奇妙に映るに違いない。

　良介を演じた中村雅俊(なかむらまさとし)は。僕が小学生の頃には、ドラマの挿入歌「ふれあい」が大ヒットしていた。今では朝ドラの『半分、青い』で、祖父役を演じる年になった。姉役の藤子を演じたのは藤村志保(ふじむらしほ)、ＮＨＫの大河ドラマ『軍師官兵衛(ぐんしかんべえ)』のナレーターを務めたが、独特の語り口が賛否両論となり、背骨の骨折で降板したのを覚えている。

第二一作「男はつらいよ　寅次郎わが道をゆく」

寅次郎は肥後（ひご）の温泉で、失恋ばかりしている男留吉（とめきち）と出会い、失恋したら潔く立ち去るべきだと諭す。失恋を繰り返す寅次郎は、先輩として失恋指南（しなん）をしているわけだ。留吉とかとめとかいう名前は、子だくさんな時代にはあったものだが、少子化の現代ではあり得ないだろう。

ところで、寅次郎はまたもや宿賃がなくて、さくらに九州まで届けに来てもらう。「寅次郎純情詩集」でも同じ設定があった。宿賃が払えないなら、現金書留か振り込みにしてもらえばいいだろうに、と考えてしまうところだが、わざわざ汽車賃かけて迎えに行くあたりが、昭和時代の人情を思い起こさせる。

さて、今回はさくらの旧友、奈々子（ななこ）がヒロインである。踊子として舞台で活躍する姿に、寅次郎は惚れてしまう。しかし、奈々子の方はあくまでもさくらの兄として、頼りに思っているだけである。奈々子は恋人と結婚して踊りをやめるか、結婚をやめて踊りを続けるかで悩んでいる。一度は諦めようとした結婚だが、恋人と再会して抱き合い、やはり結婚を選ぶことにする。その一部始終を寅次郎は、奈々子の部屋から見せつけられるのである。

この作品の魅力は、奈々子を演じた木（き）の実ナナの踊りと歌にある。情熱的な演技と歌声に、時が経つのを忘れてしまった。僕が木の実ナナを知ったのは、まだ中学生の頃である。ＮＨＫの大河ドラマ『風と雲と虹と』で、傀儡師（くぐつし）の踊子として登場し

た。その二年後にこの映画が撮影されたわけである。その後、ビートたけしの少年時代を描いたドラマ『たけしくん、ハイ！』で割烹着（かっぽうぎ）姿の母親として現れたときには、余りの変容に度肝を抜かれたが、熱演ぶりに感心したものである。

第二二作「男はつらいよ　噂の寅次郎」

木曽路（きそじ）を旅していた寅次郎は、博の父と出会う。久し振りだったので、寅次郎も最初は気がつかない。「寅次郎恋歌」以来の再会である。旅館に誘われた寅次郎は、芸者を呼んでどんちゃん騒ぎをする。人の好意にとことん甘えてしまう。天真爛漫（てんしんらんまん）と言えば聞こえがいいが。ある夜、寅次郎は博の父から『今昔物語（こんじゃくものがたり）』の一話を聞かされる。

美しい妻を失った男が、亡き妻のことが忘れられず、月夜の晩に墓を掘り返し、棺を開けたところ、腐れ果てた妻の姿が現れた。それからというもの、男は生前の美しい姿を思い起こそうとすると、変わり果てた姿しか思い浮かばず、仏門に入った

という話だった。

それを聞いた寅次郎は、またもや大いに反省し、柴又に帰ってから「とらや」の人たちに、人の世の空(むな)しさについて語る。「寅次郎恋歌」でも博の父から、人間の本当の幸せについて諭され、幸せを象徴する竜胆の花の話を繰り返していた。パターンとしてはほとんど同じである。

ただ、寅次郎のにわか悟りは長続きしない。「とらや」の店員となった早苗(さなえ)を見た寅次郎は、またもや一目惚れする。早苗が夫と別れたことを知り、有頂天となってしまう。ただ、高校教師の添田(そえだ)が早苗を慕っていることを知り、寅次郎は自ら身を引いて、いつものように旅に出る。人の世の空しさを知ったのだろうか。それが教訓とならなかったからこそ、『男はつらい

よ』のシリーズが続いたわけである。

第二三作「男はつらいよ　翔んでる寅次郎」

甥の満男が書いた作文に、おじさんがお嫁さんをもらって、お母さん（さくら）を安心させてほしいとあったのに、へそを曲げた寅次郎は、「とらや」を飛び出して北海道へと旅立つ。そこで、一人旅をするひとみと出会う。ひとみは見ず知らずの男の車に乗せられ、危うく襲われるところを寅次郎に救われる。

　今の北海道はどうか知らないが、誰もいない道を一人とぼとぼ歩いていた大学生の僕も、声をかけられてトラックに乗ってしまった。自分が何もなかったのは男であるおかげだろうが、ヒッチハイクなんて死語になりつつある現在と比べれば、随分のどかでいい時代だった。

話を元に戻すと、結婚するかで悩んでいたひとみに対し、寅次郎は昔話を聞かせる。病気のおとっつぁんの薬のために、親ほども年の離れた男のもとに嫁（とつ）ぐ娘の話を、である。寅次郎が語ったのは、江戸時代の妾奉公の話みたいである。ピントが外れているところが、いかにも寅次郎らしい。

　東京に戻ったひとみは、邦男（くにお）と結婚式を挙げるのだが、お色直しでウェディング・ドレスに着替えたところで、ひとみは結婚式場から逃げ出す。タクシーで向かった先は、葛飾柴又の「とらや」。ウェディング・ドレス姿のひとみが「とらや」に入っていくところを見た人々は、寅次郎にお嫁さんが来たと噂する。寅次郎自身もそんな思いがして、翔（と）んでる気分になる。

　結婚相手の邦男が「とらや」に現れ、最初はいやがっていた

ひとみだが、失恋のプロの寅次郎が邦男を励ますうちに、二人のわだかまりも解けていく。すべてを投げ出して家を出た邦男を見直して、ひとみは結ばれたいと思うようになる。恋心を抱いていた寅次郎は失恋した上に、二人の結婚式の仲人（なこうど）までする羽目となる。

　ひとみを演じたのは、まだ二十代だった桃井（ももい）かおり。こんな顔していたんだと懐かしく思った。不器用な話し方するところなど癖が強いのだが、化粧すると見違えるほどきれいで、話し方のぎこちなさと美しい顔がアンバランスな点も、なかなか味のある女優だった。そして、ひとみの相手役邦男を演じたのが、若かった頃の布施明（ふせあきら）である。

第二四作「男はつらいよ　寅次郎春の夢」

　このシリーズはパターンが決まっている。寅次郎が旅先から戻ると、「とらや」で一悶着（ひともんちゃく）が起きて、怒った寅次郎は飛び出していく。寅次郎が帰ってくると、目の前に美人が現れて一目惚れする。ほどなく、恋は破れてふたたびテキ屋の仕事に戻るといったパターンである。だから、マンネリズムに陥らないように、何か新しい要素が必要なのだ。

　今回はビタミン剤のセールスをしているアメリカ人、マイケルが登場する。「とらや」の人たちは「舞妓（まいこ）さん」みたいに呼んでいる。ビジネスがうまくいかず、ホテル代も出せないため、御前様の勧めで「とらや」に下宿するようになる。「とらや」

の人たち、とりわけさくらの親切に感激したマイケルは、さくらのことを愛するようになる。しがない商売をしている点で、かなわぬ恋をする点で、アメリカ版の寅さんである。

一方、寅次郎は甥の満男が通う英語塾の先生、めぐみのお母さんに恋心を抱くようになる。ただ、マイケルのさくらに対する思いが詳しく表現されている分、寅次郎の恋は表面をなぞるようにしか描かれていない。決まった時間枠の中では、やむを得ないことであるが。マイケルと寅次郎が、ともに失恋したところで、マイケルはアメリカに帰郷し、寅次郎はテキ屋稼業（かぎょう）に戻っていく。

第二五作「男はつらいよ　寅次郎ハイビスカスの花」

寅次郎と相思相愛の女、リリーが最初に登場したのは「寅次郎忘れな草」、次いで「寅次郎相合い傘」で、本作が三回目である。歌手を続けるリリーが、沖縄で倒れたという知らせを受けると、高所恐怖症の寅次郎も飛行機に乗り、ふらふらになって那覇空港に降り立つ。

病院で寅次郎と再会したことで、リリーは生きる意欲を取り戻し、ほどなく退院することができた。民家に間借りした寅次郎とリリーは、夫婦のような生活を始める。ただ、それが日常になると、非日常的な感動も薄れていく。寅次郎が「暑い、暑い」と言って、水族館に通っている間、リリーは仕事を探した

めに、間借りしている家の息子、高志に車で酒場を回ってもらう。

病み上がりのリリーを働かせたくない寅次郎は、のんびりしていろと言うが、リリーは「男の世話になるのは真っ平」と答えた後、「あなたと夫婦だったら別よ」と付け加える。リリーの告白に対し、寅次郎は「お互い所帯なんか持つ柄か」と言い返す。そこに現れた高志がリリーの肩を持つので、寅次郎は「てめえ、リリーに惚れてるな」と怒鳴る。すると、リリーは怒りを爆発させて卓袱台（ちゃぶだい）をひっくり返す。翌日、寅次郎を置き去りにして、本土に帰ってしまう。

寅次郎は島伝いに船に乗り、三日三晩飲まず食わずで、行き倒れになって「とらや」に担（かつ）ぎ込まれる。元気になった頃、リ

リーが「とらや」を訪ねてくる。今度は寅次郎の方から「おれと所帯持つか」と言うと、リリーは照れて、「みんな真に受けるわよ」と言って受け流す。本当はうれしかったのに。

柴又でリリーと別れた寅次郎は、再び旅先でリリーと再会する。二人ともすごい乗りで、草津に向かって旅を続ける。やはり二人は、旅しているからこそ、本音をぶつけ合って意気投合できる。結婚に対する憧れはあっても、恋人同士でいる方が、素直な気持ちで相手を愛せるのである。

第二六作「男はつらいよ　寅次郎かもめ歌」

寅次郎の妹さくらと夫の博は、アパート暮らしから、二階建の一軒家に引っ越す。二階には息子の満男の部屋があるが、もう一室は「お兄ちゃんの部屋」だと聞いて、寅次郎は妹の心遣いに胸が熱くなる。「とらや」の二階の部屋は、下宿人に貸してあることが多いからである。いつもと違ってなごやかな感じで進んでいくが、寅次郎が差し出した新築祝いを、博が素直に受け取らなかったことで、寅次郎はへそを曲げて「とらや」を飛び出していく。

寅次郎の向かった先は、「江差追分」で有名な北海道江差。そこで極道の仲間、常吉の訃報を知る。線香の一本でも上げて

やりたいと、向かった先は奥尻島である。そこには常吉の娘すみれがいた。一九八〇年（昭和五五）制作の映画で、イカの大漁で沸く奥尻島が映っている。その十三年後の北海道南西沖地震に伴う大津波で、島は姿を一変させてしまった。海岸沿いの家は流され、震災後に防潮堤で島を囲ったために、豊かな海も過去の物となったという。貴重な映像の記録でもある。

さて、常吉の娘すみれから東京に出たいと言われた寅次郎は、父親代わりになって、アルバイト先や定時制高校への編入を世話する。ところが、そこにすみれの恋人が現れて、寅次郎は娘を奪われるような寂しさを覚えるのである。

ちなみに、入学先の高校の国語教師は、かつてのおいちゃん役松村達雄が演じている。下條正巳に役を譲った後は、教諭や

教授、坊さんなどの脇役を演じている。

第二七作「男はつらいよ　浪花の恋の寅次郎」

寅次郎は夢を見る。亀を助けて竜宮城に行くと、乙姫様はヒロインふみを演じる松坂慶子で、踊っているタコは印刷工場のタコ社長だった。柴又に戻った寅次郎がその夢について語ると、金策に追われていた社長と言い合いになる。夜になっても社長が戻らないので、寅次郎は社長が早まったと思い込み、江戸川に探しに行く。社長を死なせたと悔いて、寅次郎はなぜか「南無阿弥陀仏」と唱える。柴又帝釈天題経寺の檀家なら「お題目」だろうに。

旅先で寅次郎は墓参りの美女と出会う。ふみという名の女性である。後日、テキ屋をやってるところでふみと再会する。ふ

みは芸者をしていて、生き別れたままの弟がいた。妹さくらと生き別れだった寅次郎は、我が身のように感じて、ふみに弟と再会するように促す。ところが、弟はすでにこの世にないことを知る。悲しむふみを見て、寅次郎は何もしてやれない自分を腑甲斐(ふがい)なく思う。

真夜中に酒に酔って、寅次郎の宿を訪ねたふみだったが、寅次郎にもたれたまま居眠りしてしまう。同室で夜を過ごすのを避けた寅次郎に、ふみは「迷惑ならそう言ってくれればいいのに」と置き手紙したまま去る。

寅次郎にとっては、美女との夢のようなひとときだった。こんな女性と親しくなれるなんてと、男なら誰でもうらやむはずだ。柴又に戻った寅次郎のもとに、芸者をやめたふみが現れる。

仕事の世話をしてやりたいと、ぬか喜びの寅次郎。実はふみが芸者をやめたのは、対馬(つしま)出身の男と所帯を持つためだった。会いに来なければ、夢を見続けていられたのに、と寅次郎はこぼす。

僕が若かった頃、松坂慶子は絶世(ぜっせい)の美女と評判だった。この世の物とも思えない、天女(てんにょ)が舞い降りたかと思ってしまうほどだった。ただ、ほっそりした体型をしていたから、最近のふくよかな姿しか知らなかったら、誰かと思ってしまうだろう。でも、かすれるような声を出していた当時より、今のように響く声の方が好きだな。

第二八作「男はつらいよ　寅次郎紙風船」

　人生も半ば（なか）を過ぎてから同窓会に行くと、いろいろ考えさせられるものである。子供の頃のことがよみがえるのに、顔は皆、中年のおっさん、おばさんになっている。悪い魔法にでもかけられたような気分になる。それでも、過去のことが次々と思い出され、懐かしさで胸がいっぱいになる。ただ、寅次郎のように同級生をいじめていた場合は、招かれざる客となる。それを感じた寅次郎は、同窓会の帰りに悪酔いして暴言を吐き、また旅に出しまう。

　筑後川（ちくごがわ）のほとりの宿で、寅次郎は十八の家出娘、愛子と知り合う。ぐれていた愛子は寅次郎を慕って、テキ屋のサクラを演

じたりする。その祭りの屋台で、寅次郎は同じ稼業だった常三郎の女房光枝と出会う。夫が病気だと聞かされた寅次郎は、福岡県秋月（あきづき）の家まで訪ねていく。医者にさじを投げられた常三郎は、もし自分が死んだら、光枝と結婚してくれと言い残す。

　寅次郎は愛子に付きまとわれて面白がりながらも、こんなこと続けられないと、置き去りにしてしまう。柴又に戻った寅次郎は、光枝と再会する。常三郎が死んだことを知った寅次郎は、常三郎の言葉を思い出し、真人間（まにんげん）になろうと就職試験を受けたりする。光枝は常三郎が死ぬ前に、寅次郎と結婚しろと言った話を持ち出し、寅次郎の気持ちを確かめようとする。本心では所帯を持つことも考えていたのに、寅次郎は照れ隠しで否定してしまう。光枝がほっとした表情を見せたので、寅次郎はつら

い気持ちを抑え切れなくなる。

寅次郎は焼津（やいづ）に向かい、愛子と再会する。十八の娘では恋の対象とはならないが、「おじさん、おじさん」と慕われる寅次郎は楽しそうである。自分らしく生きているからこそ、少女に好かれているのを、寅次郎も自覚しているのである。

第二九作「男はつらいよ　寅次郎あじさいの恋」

寅次郎は京都で、陶芸家加納作次郎（かのうさくじろう）と知り合う。その家には女中をしているかがりがいた。夫に先立たれ、娘が一人いる身の上だったが、弟子の蒲原（かんばら）と結婚するはずだった。ところが、蒲原は窯（かま）を作るために、金持ちの女性と結婚することになる。失恋したかがりに対し、相手にどうして本音でぶつからないのかと、作次郎は叱りつける。芸術家は現実を無視して、理想を相手に押しつけることが多い。このことでかがりは女中をやめ、丹後（たんご）に引っ込むことになる。

かがりのことが気になった寅次郎は、会うために丹後に出向くが、帰りの船もバスも出てしまい、かがりの部屋に泊まるこ

とになる。結局、何も起こらないのだが、隣室でかがりが片づける音がしたり、寝たふりの寅次郎を見ながら、窓を閉めたり明かりを消したり、思わせぶりの演技が続く。翌日、寅次郎が帰るとき、かがりは「もう会えないのね」と洩らす。

　柴又に戻った寅次郎は、恋煩（こいわずら）いにかかって寝込んでいる。ただ、その演技はわざとらしい。かがりが「とらや」に会いに来て、「あじさい寺で待ってます」という付け文を渡すと、寅次郎は「鎌倉はどっちだ」と言いながら、熱病にかかったように、ピンクの洗濯物を頭に引っかけたまま、通りを突き進んでいく。喜劇だと割切っても、ちょっとやり過ぎなのではないか。

　かがりとのデートの日、照れくさい寅次郎は、甥の満男を無理やり連れていく。お邪魔虫を引っ張っていったのは、寅次郎

の方にためらいがあるからだろう。よそ行きになってしまい、普段の自分が出せないためである。かがりの方でも、言いたいことがたくさんあったのに言えなくなる。かがりに「優しくて面白いかったのは、旅先の寅さんだったのね」と言われてしまう。

　かがりを演じたのは、いしだあゆみ。子供の頃聴いた「ブルー・ライト・ヨコハマ」が頭にあったから、歌手から女優に転向したのかと思ったが、舞台俳優としてスカウトされて芸能界に入った。最近の人にとっては、女優というイメージしかないのではないか。

第三〇作「男はつらいよ　花も嵐も寅次郎」

寅次郎は大分の湯平(ゆのひら)温泉で、母の遺骨を持った青年三郎と出会う。母が生前、この旅館で働いていたので、納骨前に連れてきたのだった。その話を聞いた寅次郎は感心し、母親の供養を旅館でやってやる。

その旅館には二人組の女性客が泊まっていた。納骨後に車を運転していた三郎は、二人組と一緒だった寅次郎と再会を果たす。四人でサファリパークで遊んでいると、ヨハンシュトラウスの「春の声」が聞こえてくる。何だかどこかであった設定だと思ったら、第九作の「柴又慕情」で歌子たちが、寅次郎と交歓する場面でも、流れていた音楽だった。三郎は二人のうちの

蛍子(けいこ)が好きになり、別れ際に「付き合うてくれませんか」とプロポーズする。

三郎と柴又に戻った寅次郎は、女性とうまく口がきけない三郎に恋愛指南をし、蛍子との仲を取り持とうとする。動物園の飼育員をしている三郎は、デート中にチンパンジーの話しかできない朴訥(ぼくとつ)な青年だった。恋愛指南を買って出る点では、「寅次郎頑張れ！」の良介の場合と同じである。最後は三郎と蛍子は結ばれる。二人の相談に乗りながらも、蛍子を可愛がっていた寅次郎は、「用なし」になったと旅に出ることになる。

三郎を演じたのは、ジュリーと呼ばれた若き日の沢田研二(さわだけんじ)。確かに色気のある二枚目で、今の女性に人気がある子供っぽい優男(やさおとこ)とは違う。僕が通っていた高校の教室には、「ス・ト・リ

・ッ・パ・ー」を歌っているポスターが貼られていた。レースのついた派手な衣装も、若者の心をとらえていた。

螢子を演じたのは、沢田と結婚した田中裕子(たなかゆうこ)。この映画の撮影後、朝ドラの『おしん』に主役として抜擢(ばってき)され、お茶の間に広く愛されるようになった。若い頃はこんなかわいい顔していたんだなと懐かしく思った。

第三一作「男はつらいよ　旅と女と寅次郎」

歌手や俳優は人もうらやむ職業だが、本人にはつらいことも多いという。デビュー当初はろくに給料が払われず、ひとたびヒットすれば、過密なスケジュールを入れられて、自分の時間が持てなくなる。親の死に目にも合わせてもらえない。心に傷を負っても休めない。

演歌歌手の京はるみは、失恋したことや仕事に疲れ果てていたことで、ショーをすっぽかして逃げ出してしまう。事務所には「さがさないでね」と書き置きを残して。サングラスをかけて人目につかぬようにして。新潟の海岸で寅次郎と出会い、漁船に乗って佐渡に渡ってしまう。

寅次郎との束(つか)の間の休息に、はるみの心は癒(いや)されていく。ショーをすっぽかしたことを悔やみながらも、人間らしい気持ちを取り戻し、海岸で自慢の美声を披露する。そこにプロダクションの社長らが追いかけてくる。すんでのところで漁船に乗り込み、小木(おぎ)の港に逃げ出すが、結局見つかってしまう。寅次郎との思い出を大切にして、はるみは芸能生活に戻っていく。

柴又に戻った寅次郎は、魂が抜かれたような放心状態に陥る。その頃、若者に人気があったウォークマンを手に取り、金も払わずに持っていってしまう。聴いているのは京はるみの歌である。いかにも昭和の終わり頃の風俗で、ウォークマンも当時は携帯用のラジカセだった。商店が開店すると、チンドン屋が町を練り歩いていた。

京はるみは柴又のとらやを訪れ、寅次郎と再会する。元気になった姿に安心するが、はるみが失恋した相手とやり直すと聞いて、寅次郎は心の底で思っていた人を失った気がして、またテキ屋稼業の旅に出る。

京はるみは、言うまでもなく、演歌歌手都(みやこ)はるみのことである。この映画を撮影した翌年、「普通のおばさんになりたい」と引退を表明する。五年後に復帰するわけだが、その間にはつらい思いもしたらしい。都はるみのファンだった作家中上健次(なかがみけんじ)に、歌手生活がいやになったことを話すと、「ばかやろう」と怒鳴られたという。「お前な、お前の歌で心を動かされる人がいっぱいいいるんだ。それをなんだ、恥ずかしいなんて」と。この映画を見ていると、気は短いが本音で語る寅次郎と、中上健

次の姿が重なってしまう。

第三二作「男はつらいよ　口笛を吹く寅次郎」

アマゾン・プライムの会員になったので、どんなビデオが見られるか調べたら、『男はつらいよ』の全篇が登録されていた。フーテンの寅さんの映画は、今までに数本見てきた。日本語教育の教科書に、「寅次郎恋歌」のシナリオの一部が収録されていて、外国人の学生と一緒に見て大笑いしたものである。

　今回見たのは「口笛を吹く寅次郎」。制作年は一九八三年（昭和五八）だから、僕がちょうど大学生の頃。実はそのとき、見たいなと思いつつ、そのままになっていた。寅次郎が袈裟（けさ）を着て、坊さんの真似事をやると聞いていたので。「寅次郎恋歌」では、寅次郎の妹、さくらの夫である博の父に、平凡な日常生

活の中にこそ、本当の幸せがあると諭され、寅次郎は真面目に生きようと思ったわけだが、今回は博の父の三回忌で、寅次郎が備中高梁（びっちゅうたかはし）にある博の父の墓参りをしたとき、酒に酔った住職と娘の朋子に出会ってしまう。

　二日酔いで体調の悪い住職に代わって、寅次郎が法事を行い、法話と称して馬鹿話を披露し、檀家の人たちを大笑いさせてしまう。寅次郎は博の父の法事でも、住職に付き従って袈裟姿で登場し、妹さくらは生きた心地がしない。

　今回は娘の朋子（ともこ）と寅次郎がいい仲になり、婿（むこ）養子となるために、柴又帝釈天で僧侶の修行を願い出るが、三日坊主で終わってしまう。朋子が柴又にやってくるが、寅次郎は本心を言えぬままで幕切れとなる。寅次郎の失恋で終わる毎度のパターンで

ある。朋子を演じたのは竹下景子。竹下は「知床（しれとこ）慕情」ではりん子、「寅次郎心の旅路」では久美子（くみこ）として登場する。住職を演じたのは、二代目おいちゃんだった松村達雄。

　結末はいつも同じなのに、『男はつらいよ』を見ていて楽しいのは、寅次郎と妹さくら、「とらや」のおいちゃん、おばちゃん、博の働く工場の社長など、家族と再会したような懐かしさを感じるからだろう。寅次郎の語りの名調子も、下町の義理人情も、思いを直接表現できないもどかしさも、個人商店が軒を連ねた街並みも、すべて昭和時代の風俗を伝えている。

　その頃青春のまっただ中にいた自分に、重ね合わせていたのだろう。人生にはいろいろなことがある。大切なのは、人と人

の心のつながりだということに、気づかせてくれるのである。一日中、スマホの画面を見続ける現代人を思うと、世の中が便利になった分、生き生きとした人とのつながりも薄れ、うそ寒い思いをせずにはいられない。

第三三作「男はつらいよ　夜霧にむせぶ寅次郎」

　この作品で久し振りに、寅次郎の舎弟川又登が登場する。テキ屋稼業から足を洗って、今は盛岡で女房と食堂をやっている。登は再会を喜んで、女房に酒や魚を買ってこい、店を閉めろと言うが、寅次郎は登に対し、堅気になったんだから、そんなことでどうすると諭して、すぐに店を出てしまう。寅次郎の後ろ姿は寂しげである。

　釧路(くしろ)に出た寅次郎は、理容師の風子(ふうこ)と出会う。「フーテンの風子」のあだ名を持つ風子は、寅次郎が「フーテンの寅」と呼ばれていることを知ると意気投合する。この二人の関係は、寅次郎とリリーの関係に似ている。ただ、大きな違いは、風子が

かなり年下なので、恋人同士にはなれないことと、風子にはサーカスでバイクの曲芸をやってるトニーという男がついている点である。

風子はいったんは根室で理容師となるが、寅次郎とともに旅に出たいと言い出す。それに対して、まじめに働いて所帯を持てと風子を諭す。寅次郎は根室（ねむろ）を後にするが、風子はトニーと恋仲になってしまう。

柴又に戻った寅次郎のもとに、トニーが訪ねてくる。風子が病気だから会ってやってくれ、と言いに来たのだった。寅次郎は自堕落（じだらく）なトニーに、風子から手を引けと言う。風子は「とらや」で生活することになったが、寅次郎の干渉を知って、「私とトニーのことなのよ」と言って「とらや」を飛び出していく。

結局、風子はまじめな青年と結婚するのだが、後味としてはあまり良くない。トニーのことが表面的にしか描かれていない。いつもの寅次郎なら、トニーに対してもなにがしかのケアーがありそうなものだが、今回は風子との関係を切らせて放置している。まじめな青年との結婚式も、取って付けたような感じだし、結末の熊騒動も蛇足だろう。

第三四作「男はつらいよ　寅次郎真実一路」

金がないのに居酒屋で飲んでしまった寅次郎は、たまたま居合わせた証券会社の課長健吉（けんきち）に、酒代をおごってもらう。米倉斉加年は以前、東大助教授や警官として登場したはずだが、今回はモーレツ社員の役である。午前様になっても、翌日は六時に家を出る。酒を飲んだからといって、決して遅刻してはならない。

家族のために、自然の残る茨城県（いばらきけん）の牛久沼（うしくぬま）に家を建てたのだろう。農村の雰囲気が漂う風景と、新興住宅地が隣り合わせている。長期離通勤は「痛勤」という造語を生んだ。バブル経済がはじける前、昇る日は沈まないと思われた日本経済華やかな

りし頃、仕事のためなら、家族とほとんど話ができなくても当たり前、海外から「エコノミック・アニマル」と揶揄（やゆ）されながらも、必死に働くことが美徳とされていた時代である。

酒をおごってもらった礼に、健吉の会社に現れた寅次郎は、夜九時まで待合室で待たされ、ソファーで居眠りしている。ようやく仕事の終わった健吉と寅次郎は居酒屋に行き、泥酔して牛久沼の自宅に向かう。翌朝、寝坊した寅次郎は、健吉の妻ふじ子と顔を合わせ、美しさに見とれながらも、人妻であることを考え、あわてて朝食もとらずに出て行く。

仕事に疲れ果てた健吉が、行方不明になった知らせを受けた寅次郎は、ふじ子とともに健吉の故郷鹿児島（かごしま）に向かう。開聞岳（かいもんだけ）が見える辺りで、生死不明の健吉が愛した地を、順に巡ってい

くのである。しかし、健吉の消息はつかめず、このまま健吉が現れなければという妄想を抱いた寅次郎は、自身の醜さに煩悶（はんもん）する。そのまま旅に出ようとしたところに、ようやく健吉が現れ、牛久沼のふじ子のもとにタクシーで届けるのである。

　ふじ子を演じたのは、大原麗子（おおはられいこ）である。大原はＮＨＫの大河ドラマによく出演していた。『春日局（かすがのつぼね）』で主人公のおふくを好演した。僕がよく記憶しているのは、『徳川慶喜（とくがわよしのぶ）』で新門辰五郎（しんもんたつごろう）の妻れんと、ナレーションを担当したことで、粋な女性の江戸弁による語り口が耳に残っている。そう言えば、ずいぶんテレビで見ていないなと思ったら、二〇〇九年（平成二一）に亡くなっていた。自宅で死亡しているのが発見されたという。脳内出血だったらしいが、寂しい最期となった。

第三五作「男はつらいよ　寅次郎恋愛塾」

寅次郎は仲間と、五島の青砂ヶ浦に寄った。岸辺で老婆が倒れたので、家に連れていってやる。その夜、老婆のうちで酒を飲み、歌って踊っての夜を過ごす。老婆は体調が急変し、寅次郎に感謝しながら息を引き取る。五島はキリシタンの島であり、老婆の葬儀もカトリックの教会で行われる。

　そこに孫娘の若菜（わかな）が、東京から戻ってくる。若菜の母は若い男に騙され、妊娠させられて若菜を生んだだが、島の人に後ろ指をさされて自殺した。カトリックでは自殺は禁止されているから、老婆にとっては悲しみに追い打ちをかけられたことになる。そうした暗い過去を、老婆の孫娘も背負ってきたのである。

東京に帰ってきた若菜を、寅次郎は訪ねていく。印刷会社をやめてしまった若菜に、寅次郎は就職の世話までしてやる。同じアパートには、司法試験を目指す民夫という青年がいた。密（ひそ）かに若菜のことを慕っていたので、寅次郎は民夫に恋愛指南を行う。「寅次郎頑張れ！」の良介や、「花も嵐も寅次郎」の三郎に行ったように。

しかも、失恋したと思い込み、民夫が自殺未遂するところなど、良介の場合とそっくりである。「寅次郎頑張れ」の舞台は平戸だったが、今回は五島の中通島（なかどおりじま）である。ともにカトリックの信仰が根づいており、最後に若い二人が結ばれる点も同じである。

恋愛指南をする場合、寅次郎は相手の女性と一定の距離を保

ち、首ったけにはならない。その点で、喜劇的な要素が薄いと言える。ふられて寂しく柴又を去る場面が、今回は見られないのである。

第三六作「男はつらいよ　柴又より愛をこめて」

印刷工場の社長の娘、あけみが家出してしまう。下田にいるらしいことが分かると、寅次郎が連れ戻しに行くことになった。あけみは寅次郎の飾らない、率直なところが好きなのだろう。すぐには帰りたがらないので、寅次郎はあけみの望むまま、式根島への船に乗り込む。小学校の同窓会で帰郷する若者たちと意気投合した寅次郎は、あけみのことはほったらかしで、若者たちと車に乗り込んでしまう。

港に取り残されたあけみは、旅館をやっている純情な青年、茂に好感を抱くようになる。一方、寅次郎は同窓会で同席した真知子先生と親しくなる。真知子は寅次郎に、教師という仕

事の喜びと切なさを語る。生徒を学校から送り出すことは、教師にとって喜びであるとともに別れでもある。子供たちは外の世界で人生を歩んでいくのに、教師は教える子供が代わっても、学校に留まり続ける。こんなことを繰り返しながら、教師は年を取ってしまう。耳を傾けるうちに、寅次郎は真知子に心引かれていく。

一方、あけみは茂に求婚されて、夢のような気分から目が覚める。「あたし人妻なの！」と叫んで逃げ去る、純情な青年の心を傷つけてしまったのを悔いて。あけみのつらい思いを聞かされた寅次郎は、真知子への思いを振り払って、式根島を去ることを決意する。

その後、真知子は柴又に現れ、寅次郎の恋心はよみがえるの

だが。真知子を演じたのは栗原小巻である。僕が初めて栗原を見たのは、呂宋助左衛門を主人公にした、ＮＨＫの大河ドラマ『黄金の日々』においてだった。栗原は助左衛門の憧れの女性美緒を演じた。中学生だった僕は、子供ながらにも、ボーイッシュな感じの美人だと思ったものだ。

第三七作「男はつらいよ　幸福の青い鳥」

第八作「寅次郎恋歌」の冒頭と結末に、旅役者中村菊之丞の一座が出てくる。座長の娘は大空小百合の芸名で演じていた。寅次郎は傘で見送った小百合に景気よく紙幣を渡すが、千円のつもりが五千円札だったので、宿代がなくなるという落ちがついていた。

筑豊を旅した寅次郎は、座長の死を聞き、かつて小百合の名で芸人をしていた美保と再会する。別れ際に美保は「青い鳥がほしい」と洩らす。旅館で芸者のような仕事をするのに飽き足らずにいたのだ。寅次郎は美保に、東京に出てくるようなことがあったら、柴又に寄るように言い残す。

上京した美保は、チンピラにからまれる。それを救ったのが、看板屋の健吾（けんご）だった。美保が発熱しているのを知り、自分の部屋に呼んで面倒を見る。健吾は画家志望の青年で、プライドが高く、屈折した心の持ち主だった。親切にしたのも、下心（したごころ）がなかったわけではない。気になりつつも、美保は置き手紙をして部屋を去る。

「とらや」を訪れた美保に、寅次郎は二階の部屋を提供し、就職先も紹介してやる。美保に対して「一点のやましさもない」と宣言する寅次郎は、お婿さん探しまで始める。だが、美保は健吾のことが忘れられず、看板屋を訪ねていた。賞に落選してスランプ状態の健吾は、そばにいてほしくて、美保をベッドに押し倒す。愛情表現が不器用な健吾に、ショックを受けた美保

は部屋を出て行く。

屈折した画家志望の青年を演じたのは、長渕剛（ながぶちつよし）である。最近の写真しか見ていなかったから、若い頃はこんな顔していたんだと思った。感情の起伏が激しいが、根はいい奴で、調子に乗ってハーモニカ吹いてるところが、さすがに決まっていた。

「乾杯」を歌う歌手ぐらいにしか思っていなかったが、魅力ある演技には感服した。

美保を演じたのは、志穂美悦子（しほみえつこ）である。この作品を撮影した翌年の一九八七年に長渕剛と結婚した。実は、僕は志穂美悦子を目の前で見たことがある。中学三年の時に、『ゲーム ホントにホント？』というクイズ番組に出たとき、志穂美悦子はレギュラーとして出演していた。ＮＨＫのスタジオに入ったこと

は、その時以外にはない。

第三八作「男はつらいよ　知床慕情」

「とらや」のおいちゃんが入院しているところに、寅次郎は帰ってくる。休業していた「とらや」を開店することになり、寅次郎は店で働くことになったが、堅気な仕事には向かない性分（しょうぶん）、怒ったおばちゃんが「とらや」をやめようと言い出したのを漏れ聞いて、寅次郎は肩を落として柴又を去る。

　寅次郎が向かったのは知床だった。ヒッチハイクで獣医の順吉（じゅんきち）の車に乗せてもらい、そのまま、居候（いそうろう）することになる。妻を失った順吉には一人娘のりん子がいた。反対を押し切ってした結婚に失敗し、故郷の知床に戻ってきたのだが、父と娘で顔をつきあわせるのは気まずい。寅次郎が間に立って、二人の

仲を取り持つことになる。

順吉の身の回りの世話は、スナック「はまなす」のママ悦子がやっていた。二人は突（つ）っ慳貪（けんどん）な会話しかしないのだが、実は惚れ合っているのではないかと、寅次郎はにらんでいる。そこで今度は、順吉と悦子を結ばせようとするのだが。

順吉を演じたのは三船敏郎（みふねとしろう）である。黒澤明（くろさわあきら）の映画『羅生門（らしょうもん）』や『七人の侍』で好演した俳優である。大正生まれの三船が演じた順吉は、頑固一徹でかわいい娘りん子に対しても、本心を隠したままつらく当たる。大正生まれと言えば、第二次世界大戦で戦地に送られた世代である。頑固さにかけては、続く昭和一桁（ひとけた）の父親よりまさっていた。

それを見ていて、中国大陸で軍医をしていて、終戦後に個人

病院を開いていた一人の医師のことを思い出した。父親に逆らって画家を目指した娘を決して許そうとせず、母親は娘と密会することしかできなかった。順吉のりん子に対する態度を見て、連想せずにはいられなかった。予科練に入隊していた僕の父も、頑固さでは相当なものだったが、娘である僕の妹には甘かった。

りん子を演じていたのは、僕の世代にはアイドル的存在だった竹下景子である。「口笛を吹く寅次郎」では、松村達雄が演じた住職の娘朋子役だった。清冽（せいれつ）な印象を持っていた竹下が、朝ドラの『わろてんか』でついに祖母役で登場したのを見て、時の流れというものを感じさせられた。

第三九作「男はつらいよ　寅次郎物語」

「とらや」に秀吉（ひでよし）という少年が尋ねてくる。父親はテキ屋で、自分が死んだら寅次郎を頼るようにと言い残した。「飲む、打つ、買う」のヤクザ者で、怒り出すと女房の髪の毛をつかんで引きずり回す。それに耐えかねて、秀吉の母ふでは蒸発していた。

　寅次郎は少年を連れて、母ふでを捜（さが）す旅に出る。和歌山にはすでにおらず、吉野の宿に泊まったところで、少年は高熱を出す。隣室にいた隆子（たかこ）は親身になって看病してくれる。隆子は寅次郎のことを父親だと思って「お父さん」と呼ぶと、寅次郎は隆子のことを「母さん」と呼ぶ。

　少年の熱は下がり、寅次郎は少年と隆子を連れて、金峯山寺（きんぶせんじ）に参拝する。人目にはまるで家族のようである。擬似（ぎじ）的な夫婦、親子に見える。寅次郎は隆子と少年三人で暮らす家庭を夢見る。寅次郎と隆子は心が通じるようになるが、これはあくまでも少年が結びつけたもので、本当は寅次郎の子ですらない。それを寅次郎も隆子も知っており、後ろ髪を引かれながらもきっぱりと別れる。

　今回の物語は、母親ふでを捜す旅の途中で、袖（そで）すり合うも多生（たしょう）の縁のような、心温まるエピソードが展開するところに特徴がある。他人の子供なのに、なぜ隆子が親身となったか、それは隆子が子供を堕（お）ろしていたからという種明かしがされる。少年とふでが志摩（しま）で再会する場面では、すでに物語のピークは過ぎ

ており、寅次郎は別れを惜しむことなく柴又に戻る。
隆子を演じたのは秋吉久美子である。僕が初めて知ったのは、NHKの大河ドラマ『花神』においてだった。高杉晋作の妾おうのを演じていた。「うち、あほやさかい」と酔って乱れた感じが、妙に艶っぽかったのを覚えている。その記憶があるから、母性本能を見せた今回の演技が新鮮に思われた。

第四〇作「男はつらいよ　寅次郎サラダ記念日」

信州小諸を旅した寅次郎は、人なつっこい老婆と親しくなり、一晩泊めてもらうことになる。翌朝、女医の真知子がやってきて、老婆を入院させようとする。老婆はこの家で死にたいと言うが、寅次郎に説得されて入院する。
女医の真知子は、山好きの夫を遭難で失い、息子を東京の母に預けて、一人暮らしをしていた。そこに姪の由紀がやって来る。由紀は早稲田大学に通う学生で、寅次郎と真知子を結びつけたいと思っている。
柴又に戻った寅次郎は、由紀が通う早稲田大学の授業に出て、勝手な演説をぶちはじめる。学生の爆笑で講義は台無しになっ

てしまう。今とは違って、部外者が警備員につまみ出されることもなかった。教師も学生もゆったりしていて、自由な空気があの頃にはあった。

今回のタイトルは、俵万智（たわらまち）の短歌集『サラダ記念日』にちなんでいる。どうやら、由紀を俵万智になぞらえているらしい。ただ、寅次郎の恋物語としては、今一つ物足りない。女医の真知子とのからみが弱い気がする。互いに好意を抱いている程度である。

大きな変更点としては、さくらが団子屋を切り回すようになり、店の名前も「くるまや」に変わっていること。モデルとなった団子屋が「とらや」と改名したので、山田洋次監督が不快感を示して変更したらしい。

僕にとっては、真知子や由紀よりも、最初に登場した老婆の方が味があって良かった。鈴木光枝（すずきみつえ）はいかにも、おばあちゃんといった感じで、いつまで経（た）っても若作りの老女が多い今の時代には、とても懐かしい気がした。

あと、寅次郎が甥の満男に対し、早稲田大学を受験しろと言っている場面を見て、今は亡き父が、僕の従兄（いとこ）と結婚した早稲田の女学生に「どうしたら早稲田大学に入れるか、よく話を聞いておけ」と言ったのを思い出した。

第四一作「男はつらいよ　寅次郎心の旅路」

宮城（みやぎ）のローカル線に乗っていた寅次郎は、列車で自殺未遂した坂口と知り合い親しくなる。男は心の病を抱（かか）えており、寅次郎について回るようになる。やりたいことをやれと励ますと、オーストリアのウィーンに旅行するので、寅次郎についてきてほしいという。

気の進まぬまま、坂口とともにウィーンに旅立った寅次郎だが、どう見ても場違いで居場所がない。納豆（なっとう）と味噌汁でご飯を食べたいのに、パンとウィンナーでは食欲も湧かない。坂口とはぐれた寅次郎は、バスガイドをしている久美子と出会う。

海外が舞台になるのは初めてである。ウィーンの街の雰囲気

は悪くないのだが、寅次郎がつまらなそうにしているので、見ている方も退屈してしまう。こちらまで時間を持て余してしまうのだ。坂口とは別行動をとり、久美子の悩みを聞いてやった寅次郎は、故郷の岐阜（ぎふ）に戻るように勧める。いったんは帰国を決意した久美子だったが、そこにオーストリア人の恋人が現れて。

寅次郎が元気ない。この頃から渥美清は体調を崩しており、毎度恒例（こうれい）だった派手な喧嘩もなくなり、威勢良く啖呵を切ることもなくなった。そういえば、前回の『寅次郎サラダ記念日』から、冒頭の夢物語もなくなっていた。ヒロインの久美子を演じたのは竹下景子。「口笛を吹く寅次郎」では住職の娘朋子を、「知床慕情」では獣医の娘りん子を演じていた。

第四二作「男はつらいよ　ぼくの伯父さん」

今回は寅次郎の甥、満男を中心に物語が展開する。大学に落ちて予備校生になり、いつもいらいらしていて、父親の博や母親のさくらと衝突している。そこで、伯父の寅次郎が満男の話を聞いてやることになる。

寅次郎はさばけた男なので、若者の気持ちが分かるだろうということだが、案の定、満男に酒を飲ませて本音を言わせる。満男は転校した下級生の泉（いずみ）に恋していたのだった。泥酔して「くるまや」に戻ると、怒った博は満男を平手打ちにする。寅次郎も面白くなくなり、旅に出てしまう。

高校を出れば一人前、未成年でも平気で酒を飲んでいた時代

である。四月の中旬ともなれば、駅前の歩道には泥酔した新入生が多数横たわっていた。そう言えば、床屋のおじさんに勧められて初めて煙草（たばこ）を吸ったのは、まだ高校生の時だった。僕が在学していた高校は、トイレを見つけるのが簡単だった。煙が出ている所がトイレだったから。外で父と酒を飲んだのもその頃だった。予備校生の時には泥酔して帰ったのだが、父には何も言われなかった。自分の若い頃を思い出したんだろう。予科練から帰還してからは、随分荒れていたらしいから。普段はとても怖い人だったが、若者の心はよく分かっていた。何だか性格は寅次郎みたいだったな。

余談が長くなってしまった。満男は家出して、泉に会いに名古屋へ行く。さらに、泉の下宿先の佐賀にまで足を伸ばす。泉

と再会した後、旅館に行くと部屋が空いていない。相部屋することになり、そこにいたのが寅次郎だった。喜劇でなければあり得ない設定だが、寅次郎の満男に対する恋愛塾が始まる。満男にせがまれて、寅次郎も泉の下宿先に押しかけていく。
　ちょうどバブル経済が崩壊する前で、親にも経済的な余裕があったし、子供の方でも青春を謳歌（おうか）する自由があった。学費のためにアルバイトをし、就職しても奨学金の借金が山とある現在の学生とは違って、随分恵まれていた時代だった。

第四三作「男はつらいよ　寅次郎の休日」

冒頭の寅次郎の夢が復活した。寅次郎が公家（くげ）となって月見をしていると、そこに旅の女性（にょしょう）が訪ねてくる。もう分かっただろう？　女の名は桜式部（さくらしきぶ）という。生き別れていた兄と妹の再会というお決まりのパターンではあるが、常連にとっては楽しみの一つである。
　今回は「ぼくの伯父さん」の続きで、実質的な主人公は、甥の満男に移っている。満男の後輩泉が、別居中の父親を訪ねて東京にやって来る。名古屋で母親と暮らしていたのだが、浮気の相手と別れて家族の許に戻ってきてほしいと、父親に告げるためだった。ところが、父親は大分の日田（ひた）に引っ越していた。

名古屋に戻るはずの泉は日田に行くと言い出し、東京駅に見送りに来た満男も、心配で新幹線に乗ってしまう。

　ところが、日田のうちを訪ねると、父親は薬剤師の女と幸せそうに暮らしていた。別れて母親の所に戻ってほしいと、泉は言い出せず、衝動的に立ち去ってしまう。途方に暮れていた満男と泉は、寅次郎と泉の母親礼子（れいこ）とぱったり出会う。寅次郎と礼子は、若い二人の身を案じて、日田にやって来たのだった。そのまま温泉旅館に行き、四人は家族のような一夜を過ごす。水商売という職業柄色っぽい泉の母親に、寅次郎は心を動かされてしまう。ここに至ってようやく、寅次郎らしさが出てくるのだが。

　満男は大学生になっているが、精神的に自立したくて、母親

のさくらの世話を煙たがっている。思わず反抗的な態度を取って、父親の博と衝突している。思い返せば、僕にもそういう時期があった。あれこれと指示する母親に、ロボット扱いするなと毒づいたことも。家族と旅行するのなんか、真っ平（まっぴら）ごめんと思ったりした。

　すでに新幹線が博多（はかた）まで開業していたが、寝台特急のブルートレインは健在だった。寅次郎と泉の母親礼子が、ビールを飲みながら語らう場面が出てきたが、のんびり夜行で旅する間に、人生について考えたり語り合ったりできたのも、夜通しの移動の時間があったからである。飛行機の方が速くて割安な昨今（さっこん）だが、いきなり現地に着陸するのでは、旅情も何もあったもんじゃない。

第四四作「男はつらいよ　寅次郎の告白」

このシリーズは車寅次郎の旅と女、恋がテーマだったが、渥美清の体調不良で、寅次郎の出演場面を減らさざるを得ず、甥の満男とガールフレンド泉の恋物語を、主たるテーマに据えることになった。そのために、連作の形で各回のエピソードが緩い形で結ばれていたのが、連続ドラマに近い形を取ることになった。

各回だけ見ても面白いようにするには、単独で分かる内容にしなければならない。物語の展開が満男中心になったからといって、満男の恋人を毎回代えるわけにもいかない。とにかく次作を見たいというファンの要請と、それでは新たな観客を呼び

こめないというジレンマに陥っているというわけだ。

今回は満男と泉の恋物語第三弾である。泉の母親礼子に恋人ができて、反発した泉が家出し、鳥取砂丘を見て「寂しい海が私の寂しさを吸い取ってくれるようです」という葉書を送ってよこす。心配した満男があわてて鳥取に向かう。再会できた二人は、寅次郎に連れられて、馴染みの料理屋に連れていかれる。そこは昔、寅次郎が恋した女、聖子の店だった。

恋敵だった板前が死んで、未亡人となった聖子に迫られたという設定である。寅次郎はすぐ手に入る女性が近づいてくると、自分の方から逃げ出してしまう。高嶺の花には夢中になるのはどうしてか。満男は泉に対して寅次郎の恋愛観を解き明かす。ただ、今さら聞かされるまでもない話で、シリーズを続け

るには寅次郎に所帯を持たせるわけにはいかないのである。

第四五作「男はつらいよ　寅次郎の青春」

満男のガールフレンド泉が、同級生の結婚式で宮崎に向かう。一方、油津（あぶらつ）で床屋を営む蝶子（ちょうこ）と親しくなった寅次郎は、髪結（かみゆい）の亭主のように居候している。蝶子と城見物をしているところで泉と出会い、階段を踏み外して足をけがしてしまう。その知らせに柴又は大騒ぎとなり、満男は飛行機に乗って宮崎に向かう。ただ、寅次郎のことが心配というより、泉と会いたかったのが本音のようである。

蝶子の家には、船乗りの弟竜介が帰宅していた。満男は寅次郎のもとに向かうが、泉が竜介と親しく話しているのが面白くない。竜介に嫉妬しているのである。その誤解が解けると、急

に無邪気に喜んでいるところを見ると、青春しているのは満男の方だということが分かる。

一方、寅次郎は蝶子に好感は抱いているものの、かつてのように夢中になることもなく、世話になったことに礼を言い、満男たちと柴又に帰ると蝶子に告げる。すると、軽い気持ちで同情されていたのかと、蝶子は怒り出してしまう。寅次郎としては、青春は懐かしむものとなっており、満男を通して遠くから眺めた方がいいのだろう。

柴又にまた、いつもの日常が戻ろうとしていた。満男も大学生活を再開するわけだが、泉の母礼子が手術することになる。泉は勤めていたレコード店を辞め、母親の住む名古屋に戻ることになる。満男は引き裂かれる思いで、東京駅に行って別れを

惜しむのだが。

従来の話のパターンでは、柴又に戻ってきた寅次郎が大喧嘩して飛び出し、旅先でヒロインと出会うという形を取るのだが、今回は寅次郎の恋愛が一段落するまで戻らない。タイトルは「寅次郎の青春」とあるが、実際は「満男の青春」といった方がいいのではないか。寅次郎はもう人生を達観（たっかん）したような境地（きょうち）にあり、恋愛に関しても淡泊になっているようである。

第四六作「男はつらいよ　寅次郎の縁談」

就職活動で一向に内定が取れない満男は、父親の博と喧嘩して家出してしまう。行く当てもなく乗った列車は高松行き。すでに瀬戸大橋線が開業しており、たどり着いたのは瀬戸内の琴島（ことじま）という小島である。かつて船乗りだった老人と、愛人に産ませた娘葉子（ようこ）が暮らす家だった。

満男はその家に世話になりながら、漁師の船に乗ったり、畑仕事を手伝ったりして生活している。今では診療所の看護婦亜矢（あや）に、恋心を抱くまでになっている。満男には泉という恋人がいたはずだが、今では島の娘とよろしくやっているのである。何だが恋をしては破れる寅次郎に似てきている。

家出した満男を迎えに来た寅次郎だが、船が欠航して居座る羽目になる。病み上がりの葉子と親しくなり、金刀比羅宮（ことひらぐう）や栗林（りつりん）公園へ観光に出かける仲になっている。葉子と寅次郎の心の触れ合いが前面に出ており、従来のシリーズに似た印象が感じられるのだ。

本作は「寅次郎の縁談」とあるが、寅次郎に縁談話があるわけではない。いつものように恋をして、また別れるというパターンである。ただ、久し振りに元気のいい寅次郎を見たという気がする。恋をすると人間は生き生きするものだ。寅次郎は葉子に好かれ、自ら身を引いていくのだが、二人の別れ方が自然で、ともに心が傷つかない点が大人の恋という感じがする。

また、屈折した満男が心の傷を癒していく様子も、見ていて

すがすがしい。島を去る満男に悲しむ亜矢も、正月には新しい恋人を作っている。「満男、おまえはふられたぞ。ざまを見ろ」と寅次郎は言うのだが、甥の満男を見守るまなざしは優しい。
久し振りに快作を見たという気がした。見ているこちらも、さわやかな気分となった。それは葉子を演じた松坂慶子の魅力にもよるところが大きい。「浪花の恋の寅次郎」以来の出演だが、あんなに美しいのに、裏表（うらおもて）がなく率直に物を言う姿が、男性の心をとらえて離さない。

第四七作「男はつらいよ　拝啓車寅次郎様」

満男は靴会社のセールスマンをやっている。仕事に身が入らないと、専務にとがめられている。そこで、柴又に帰郷した寅次郎が、物を売るためのコツを満男に伝授する。翌日、寅次郎は満男の会社に挨拶に行くと言い張り、おいちゃんと大喧嘩して飛び出したと、さくらは電話で満男に伝える。大喧嘩が一種の見せ場だったはずだが、それが実演されないのは、寅次郎役の渥美清の癌（がん）が肺に転移し、ドクターストップがかかっていたためだという。
そのせいか、今回の寅次郎は台詞（せりふ）の数も少なく、威勢よい演技も余り見られない。淡々と演じている感じである。写真が趣

味の典子（のりこ）と出会い、湖面を見つめながら夫婦というものについて語り合うのだが、近江長浜（おうみながはま）の曳山（ひきやま）祭りに出かけようとするところで、典子の夫が現れたために、中途半端な感じて二人の関係も終わってしまう。

　代わりに活躍するのが甥の満男で、先輩の信夫（のぶお）に呼ばれて長浜に遊びに行く。そこで、信夫の妹菜穂（なほ）と親しくなり、互いに引かれるようになる。ただ、満男には泉という恋人がいたはずである。喧嘩別れしたわけではないのに、泉とは音信不通になっているようで、その理由も明らかにされていない。前回は瀬戸内の琴島で亜矢に恋をし、今度は菜穂に引かれている。失恋を繰り返す寅次郎の後継を、満男は託されているかのようである。

　それにしても、渥美清の精神力には感服する。役者は親の死に目にも会えない仕事だ、と言われるが、病気になってもゆっくり養生することすらできない。若い頃に結核を患い、肺の片方を失いながらも演技を続け、肝臓の癌が残された肺に転移した後も、医者の忠告を退けて出演を引き受けたわけだから。渥美清は一九二八年（昭和三）の生まれで、いわゆる昭和一桁の世代である。僕の亡父と同い年で、病魔と闘い続けた姿が重なってしまう。

第四八作「男はつらいよ　寅次郎紅の花」

渥美清は末期癌で、医師の反対を押して出演した『男はつらいよ』のシリーズも、本作での演技が最後となった。没後に「寅次郎ハイビスカスの花　特別編」が作られたが、寅次郎に関しては、かつての映像などを再構成したものである。

「寅次郎紅の花」が封切りとなるとき、いよいよこれが最終作になるだろうという噂が流れた。渥美清の体力が限界に達していたこと、寅次郎にとって最高のヒロインであるリリーが出演していること、映画が制作される前のテレビ版では、ハブを捕りに奄美大島を訪れた寅次郎が、ハブに噛まれて命を落としたことなどが挙げられる。

冒頭で寅次郎が、阪神大震災でボランティアをしている姿が放送され、柴又のおいちゃん、おばちゃん、さくらたちを驚かせる。これは当時の世相を反映した枕のようなエピソードである。

その頃、長い間音信が途絶えていた泉が訪ねてくる。縁談がまとまったことを、満男に告げに来たのだった。泉としては、満男に反対してもらいたかったのだろうが。ショックを受けた満男は、無断欠勤して津山（つやま）に向かい、泉の結婚式をぶち壊す。そのまま、列車と船を乗り継いでやって来たのは、奄美群島の加計呂麻島（かけろまじま）。満男は崖から飛び降り自殺することも考えていたが、たまたま居合わせたリリーに呼び止められる。

リリーに連れてこられた家には、居候している寅次郎がいた。

風来坊（ふうらいぼう）の伯父に似てきた満男と寅次郎の対面は、偶然の一致にしては出来過ぎているが、話の展開としては面白い。寅次郎とリリーは網走で出会った頃から、今までどんなことがあったか回想する。これは、『男はつらいよ』というシリーズで、寅次郎とリリーが共演した過去を懐かしむことであり、渥美清という俳優が後半生を、車寅次郎という役に徹したことを顧みることでもある。

　泉の結婚式をぶち壊した満男について、寅次郎は男にとって引き際（ぎわ）が大切だと説く。しかし、リリーから見れば、それは恰好（かっこう）を付けているに過ぎない。男と女の仲はきれいごとじゃ済まない、女は男に本気でぶち当たってきてほしいというのである。寅次郎が生涯独身を通す羽目に陥ったのも、引き際なんかにこ

だわってきたからである。

　本作で渥美清はかなり体調が悪く、演技の合間（あいま）もつらそうにしていた。それを見たリリー役の浅丘ルリ子は、これが最終作になると直感して、山田洋次監督に寅次郎とリリーを一緒にさせてほしいと申し出たという。ただ、山田監督はこの後の構想も考えていたので、願いは聞き届けられることがなかった。

第四九作「男はつらいよ　寅次郎ハイビスカスの花　特別編」

テレビ版で奄美大島にハブを捕りに行き、逆に噛まれて「死んだはずだよ寅次郎」が、視聴者の抗議で映画として復活した。しかし、当初はこれほど長期にわたって制作されるとは、山田洋次監督も思っていなかったという。全五回で一旦制作は打ちきられるはずだったが、ついに第四八作までシリーズは続いた。山田洋次監督は、その後のストーリーも構想していたが、末期癌の手術を受けた渥美清は、一九九六年（平成八）八月に帰らぬ人となった。この作品は車寅次郎への挽歌（ばんか）として、亡くなった翌年に制作されたものである。

冒頭では満男が駅でビールを飲みながら、靴のセールスのための行商を行っている。寅次郎のような仕事をしているわけである。伯父さんは今頃何しているんだろうと、寅次郎のことを懐かしむ。満男が思い出すのは、寅次郎がリリーと出会った頃のこと。満男が回想するという形で、「寅次郎忘れな草」「寅次郎相合い傘」の一部と、「寅次郎ハイビスカスの花」の大部分が再構成され、それを満男の回想譚の中に埋め込んである。

リリーが登場する作品には、前回の「寅次郎紅の花」もあったわけだが、寅次郎とリリーがともに若く、もっとも幸せそうだったのは、「寅次郎ハイビスカスの花」の頃である。沖縄で病み上がりのリリーと寅次郎が、夫婦のような同棲生活を行っていた時期である。

前作でリリー役の浅丘ルリ子が、渥美清の体調の悪さを見て、

これが最終作になるだろうから、寅次郎とリリーを結婚させてほしいと、山田監督に願ったが、かなえられることがなかった。そこで、シリーズの最終作の中に、リリーと寅次郎が同棲していた時期を再構成して、車寅次郎に対するお別れ会をしたというのだろう。

　この作品の大部分は、「寅次郎ハイビスカスの花」から成っており、それを再び見たという印象が強い。やっぱり、一番の見どころと言えば、リリーが「男なんかの世話にはなりたくない。あなたと夫婦だったら別よ」と洩らし、照れた寅次郎が「所帯なんか持つ柄か」と言い放つと、「あんた、女の気持ちなんか分かんないのね」と涙を流す場面である。

制作されなかった続篇

渥美清の死とともに、『男はつらいよ』のシリーズは制作が困難になった。「寅次郎ハイビスカスの花　特別篇」は、かつての作品を再構成したものである。ただ、山田洋次監督の脳裏には、「寅次郎紅の花」より先の物語が構想されていた。

　そこで、西田敏行を代役に立てて、続篇を制作するという案が出たが、山田監督は固辞したという。『男はつらいよ』というシリーズは、渥美清という俳優がいたからこそ成立した映画だという思いが強かったからである。

　このシリーズが未完という印象が強いのは、甥の満男と泉の関係が中途半端なままだからである。「寅次郎紅の花」で満男

が泉の結婚式をぶち壊したのは、未撮影の「寅次郎花へんろ」で、満男が泉と結婚するという構想があったからである。それを見届けた寅次郎は、テキ屋稼業から足を洗い、幼稚園の用務員として働くことになる。寅次郎の最後のヒロインとなるのは、幼稚園の園長役となる黒柳徹子（くろやなぎてつこ）の予定だったという。子供たちと隠れん坊するうちに寅次郎は息を引き取り、町の人たちが寅次郎の思い出にお地蔵さんを作るという結末だったという。

満男を泉と結婚させてあげたかったのだが、最後のヒロインがリリー役の浅丘ルリ子でなかったら、『男はつらいよ』のシリーズの印象は異なってしまっただろう。また、シリーズを完結させるためとはいえ、末期癌で苦しんでいた渥美清に、息を引き取る場面を演じさせるのも酷（こく）だったろう。

番外篇の「虹をつかむ男」

渥美清が一九九六年（平成八）に亡くなり、『男はつらいよ』シリーズは、山田洋次監督が構想した形では未完に終わった。ただ、山田監督は、「寅次郎紅の花」の次作として「寅次郎花へんろ」を構想していた。残された脚本を書き直し、『男はつらいよ』のスタッフを中心に制作したのが本作である。何よりも人の心を大切にする監督の思いが伝わり、単独に見ても味わい深いものであるが、この作品を百パーセント味わうには、『男はつらいよ』シリーズの全作品を見ておく必要がある。

冒頭の場面で、『男はつらいよ』で満男役だった吉岡秀隆（よしおかひでたか）が、亮（りょう）という青年として列車に乗っている。「寅次郎の縁談」と

同様に、就職先が決まらずに、父親と喧嘩して家を飛び出したという設定である。父親は前田吟、母親は倍賞千恵子で『男はつらいよ』と同じであり、住まいも葛飾柴又という設定である。

四国の山あいの町に「オデオン座」というはやらない映画館がある。館主は活男という独身男。客の入りの悪い名画ばかり上映するため、いつも赤字ばかり出している。職人肌の映画技師常さんは、田中邦衛が演じている。田中邦衛と言えば、ドラマ『北の国から』で黒板五郎を演じ、息子の純は吉岡秀隆が演じていた。『北の国から』の視聴者は、両作品のイメージを脳裏に交錯させることだろう。

西田敏行は渥美清の死後、車寅次郎役を引き継ぐのではないかと噂されていた。確かに、無頼な印象は似ているし、語りだ

けでイメージを醸し出す能力という点で、渥美清に引けを取らない。もし寅次郎役を引き受けていたら、充分に演じ切れたと思う。ただ、余りに演技が個性的で、西田敏行の特長が演技によく出ている。渥美清の作った車寅次郎というイメージを守りたいという山田監督の意志で、『男はつらいよ』のシリーズは打ち切りとなったのである。

当初は同シリーズの一つとして構想されたため、活男と寅次郎は重なるところが多い。活男は喫茶店を経営する未亡人八重子に恋をしている。八重子の方でもその気持ちを充分すぎるほど知ってはいるが、再婚相手としてまでは受け容れられない。最後はふられる活男は、寅次郎と同じように、失恋しても引き際を大切にし、温かくヒロインを送り出す。

もう一つの特徴としては、映画の名作を多く映像の形で引用している点である。ジュゼッペ・トルナトーレ監督の『ニュー・シネマ・パラダイス』、アンリ・コルピ監督の『かくも長き不在』、ジーン・ケリーおよびスタンリー・ドーネン両監督による『雨に唄(うた)えば』、小津安二郎（おづやすじろう）監督の『東京物語』など。ちなみに、その作品の父親役は、『男はつらいよ』シリーズで御前様役を演じた笠智衆（りゅうちしゅう）である。あの独特な、淡々とした語り口は『男はつらいよ』になくてはならない存在だったが、シリーズ終了前の一九九三年（平成五）に亡くなっている。ここでも二重写しの異化効果を、山田監督は狙っているのだろう。

最後の場面で、活男は気に入っていた亮を、東京に戻すために首にする。別れの前に二人で見たのは、『男はつらいよ』の第一作。渥美清も、妹さくら役の倍賞千恵子も若かった。この作品は『男はつらいよ』シリーズに命を捧げた俳優、渥美清に対するもう一つの挽歌であると言える。

懐かしい「とらや」、おいちゃん、おばちゃん、タコ社長、舎弟の登、最初の恋人役である冬子の姿も映った。これを見ていた吉岡秀隆は、もう二度と『男はつらいよ』シリーズに出られないんだと思い、涙がこみ上げて止まらなかったという。長年シリーズを見てきたファンにとっても、もうあの世界は味わえないんだという思いで、胸がいっぱいになったことだろう。

なお、西田敏行の活男と、吉岡秀隆の亮の心温まる関係が好

評だったのだろう。『虹をつかむ男』はもう一作制作されることになる。

番外篇の「虹をつかむ男　南国奮斗篇」

これは『男はつらいよ』とは関係がない。また、前作の『虹をつかむ男』とも設定が異なっている。前作では「オデオン座」は四国の山あいにあったはずだが、鹿児島という設定に変わっている。亮も葛飾柴又でサラリーマンの両親と、マンション住まいをしていたはずだが、今回は戸越銀座にある平山工務店の息子という設定である。

東京に出てきた映画館の館主活男は、酒をめぐるトラブルから、錦糸町警察の留置場にいる。身元引受人として、以前活男の映画館で働いていた亮が呼び出され、亮の家族の厄介となることに。ところが、風呂桶を壊すやら、熱い鍋の載ったお膳を

引っ繰り返すやら。おまけに、ものすごいいびきをかいて、さんざん迷惑をかけて翌朝出て行く。

秋葉原の電気店を解雇された亮は、父親と喧嘩して家を飛び出す。向かった先は鹿児島の「オデオン座」。すでに閉館しており、行方を捜してたどり着いたのは、奄美の喜界島（きかいじま）。そこで亮は、子連れのシングルマザー節子と知り合う。ただ、節子には荒くれ者の兄がおり、妹が東京の男に捨てられたことに怒りを抱いている。節子に好意を持った亮に対して、理不尽（りふじん）な暴力を振るう。

その頃、亮はふたたび活男のもとで、映画の移動上映の助手として働くようになっていた。なぜ「オデオン座」が四国の山あいから鹿児島に変更されたか。それは場面を奄美の島々に移

すためには、四国からではあまりに唐突だと感じられたからだろう。また、亮の家族が変更されたのも、『男はつらいよ』とは無関係の作品として設定したかったからだろう。

活男の方も、昔映画館で働いていた松江と再会し、ボートの中で熱い夜を過ごす。ただ、松江は夫も子供もいる身である。一夜の夢でしかなかったはずなのに、活男は松江の自宅に押しかけていき、迷惑がられてしまう。何事も本音で生きていく活男は、『男はつらいよ』の寅次郎のように、失恋を運命づけられているのだろう。

ただ、『虹をつかむ男』は二作をもって制作が打ち切られた。活男自身、魅力的な人物として描かれているが、映画の移動上映をしている設定では、バリエーションを生み出すことが難し

い。また、亮という青年も純情で好感が持てるが、寅次郎のようにアウトローとして生きる人間ではない。いずれ結婚して、平凡ながらも幸せな家庭を持つはずである。その人生の一時期を切り取った作品としては、ほのぼのとした映画に仕上がっている。

第五〇作「男はつらいよ　お帰り寅さん」

第四九作「男はつらいよ　寅次郎ハイビスカスの花　特別編」から二三年の歳月を経て、第五〇作が封切りされた。寅さんのファンには、懐かしい人々との再会であり、鬼才による名場面の数々が、物語の随所にちりばめられている。僕と違って全作を見ていなくても、さくらと博の結婚、寅次郎とリリーの同棲、満男と泉の恋を描いた各作品ぐらいは見ておいた方が、より内容を楽しめるだろう。

　葛飾柴又の団子屋「とらや（くるまや）」は、喫茶店に模様替えされているが、座敷など屋敷の間取りはかつてのままである。満男の亡妻の法事が営まれ、題経寺の住職、現在の御前様

が読経している。笹野高史（ささのたかし）は『贋作　男はつらいよ』でも、法恩寺（ほうおんじ）の住職を演じている。

仏壇にはおいちゃん、おばちゃんの遺影が飾られている。おいちゃんを演じた森川信、松村達雄、下條正巳、おばちゃんの三崎千恵子もすべて鬼籍に入った。主人公の車寅次郎も亡くなっているらしいことは、第四九作の満男の言葉で暗示されているが、ドラマの上では明示されていない。トリックスターの車寅次郎は、絶世の貴公子光源氏と同じく、死は語られないのだろう。心の中では生き続けているからこそ、「お帰り寅さん」と言えるわけだ。

名場面が差しはさまれたメインストーリーは、満男と泉の後日譚である。山田洋次監督の当初の計画では、「男はつらいよ」

のシリーズは、満男と泉の結婚、それに続く寅次郎の死で締めくくられるはずだった。ところが、寅次郎を演じた渥美清の死により、物語は中絶した形になっていた。山田監督にしてみれば、満男と泉の再会によって、「男はつらいよ」のシリーズを完結させたということなのだろう。

小説家となった満男は、高校生の娘を持つが、すでに妻を亡くしている。海外で国連の仕事をする泉も既婚で子供もおり、数日後には家族の住む第二の故国に帰らなければならない。満男と泉の別れの場面は、かつては東京駅の新幹線ホームだった。今回は空港という設定である。別れ際に満男は妻を亡くしたことを泉に語る。かつての恋人は結ばれることなく、キスをして別れることになる。

今回の作品では、第一作以来のすべての作品の間に流れた時間を、演じた俳優とともに、観客も感じることになる。懐かしい名場面の多くは、昭和の終わりから平成の初めにかけて、日本がまだ豊かで、人情があふれていた時代を舞台にしている。素晴らしい体験というものは、若い頃から働き盛りの頃にするものだと、改めて感じた。

　初老の時が近づいた満男にとって、豊かな人生経験の多くは過去の出来事であるが、それを心の財産としてとらえるには、長い歳月の流れが必要だった。それを表現できる年になった満男が、小説家として登場したことは偶然ではない。

山田洋次の『悪童』

これは山田洋次監督の初の小説で、『男はつらいよ　DVDマガジン』に「けっこう毛だらけ　小説・寅さんの少年時代」とタイトルで連載されていたものを、改題して加筆したものだという。のちに、『少年寅次郎』の題名で岡田恵和（おかだよしかず）によって、NHKでドラマ化された。

　小説『悪童（ワルガキ）』は車寅次郎が、酒の席で少年時代について語るというスタイルを取っている。一人称小説ということになるが、江戸弁を使ってるからといって、夏目漱石の『坊っちゃん』のように、計算し尽くして書かれたという感じではない。勝海舟（かつかいしゅう）の父は、正式には勝左衛門太郎惟寅（さえもんたろうこれとら）で、号は夢酔（むすい）だが、勝小吉（こきち）

という通称の方が知られている。海舟の父小吉が残した『夢酔独言』の、飾らないが琴線に触れる語り口に近い。

山田監督はシナリオを書くように、この小説を書いていったんだなと感じた。スタイルは渥美清が演じた車寅次郎のもので、活字を見るだけで寅次郎の声が聞こえてくる。ただし、一人称小説の形を取ったことで、寅次郎が知ってることしか書かれていない。映画『男はつらいよ』では、寅次郎の思いと取り巻く人々の心のすれ違いが、笑いと哀愁を呼ぶのだが、一人称を選んだことで、映画のような複数の視点からの表現ができなくなった。

だから、この小説のままではドラマ化は難しく、岡田惠和のシナリオでは原作の大幅な脚色と改変が行われた。大きく異な

る点をいくつか挙げてみよう。寅次郎の叔父の竜造は、原作では東京大空襲で妻つねと逃げ惑うが、ドラマでは出征したことになっている。タコ社長の印刷工場に働きに来たサトコが、うなぎ屋の職人に弄(もてあそ)ばれるところは同じだが、原作ではタコ社長と職人が取っ組み合いをしている。英語教師坪内散歩の妻は、原作では不倫して出ていったことになっているが、ドラマでは病没した設定になっている。養母の光子の病気に気づいたのは、ドラマでは散歩先生だが、原作では光子の体をマッサージした按摩(あんま)ということになっている。父平造(へいぞう)が光子の葬儀のとき、大声で泣いたという逸話が、ドラマでは平造が家を空けてる間に光子が亡くなり、喪主(もしゅ)を務めた寅次郎に父平造がからんだことが、寅次郎出奔の原因になっている。

したがって、岡田惠和のドラマは要点では原作に忠実だが、細かい点ではかなり設定が異なっている。そうした脚色や改変は、実際にドラマを見た印象から述べると、非常に成功している。

なお、今回の改版で『悪童』には、文化放送で流された倍賞千恵子の朗読の抜粋が、ＣＤ２枚の形で付属している。情感のこもった朗読と、『男はつらいよ』で流された音楽や効果音が一体となり、ほのぼのとした場景が目に浮かぶ。原作とドラマの違いは、変奏曲のようなもので、小さな違いよりも、湧き上がる感動に身を任せればいい。

岡田惠和の『少年寅次郎』

山田洋次監督の『男はつらいよ』シリーズは、中年以上の世代には国民的映画として知られている。『男はつらいよ』にはテレビ版と劇場版があり、一般に知られているのは後者の方である。

それとは別に、山田監督には『悪童』という小説がある。『男はつらいよ』シリーズの主人公、車寅次郎の少年時代を描いた小説で、いずれ山田監督により映画化されるものと期待されていたが、一足先に『ちゅらさん』や『ひよっこ』で知られる岡田惠和氏によってテレビドラマ化された。

このドラマを見る視聴者は、多くが『男はつらいよ』シリー

ズのファンだろう。したがって、『少年寅次郎』に登場する人物を、『男はつらいよ』の登場人物の若かりし日の姿として見ることになる。

第一回は寅次郎の生い立ちから、妹さくらの誕生までが描かれた。父平造が芸者きくに生ませた子供を、平造の妻光子が我が子のように愛し育てる。光子役の井上真央（いのうえまお）と少年寅次郎役の藤原颯音（ふじわらはやと）の仲むつまじさがほほえましい。寅次郎の悪ガキだが心優しい面がよく描かれている。柴又帝釈天の住職、御前様役の石丸幹二（いしまるかんじ）の演技に、笠智衆の仕草が重なって見えた。好調な滑り出しだが、全体の印象としては、岡田惠和のほのぼのとした世界である。

小学生の寅次郎は、廊下に立たされながらも、面白ことを言ってクラスを笑わせる。エンターテイナーの素質を、生まれながら持っており、愉快な少年として描かれている。

ただ、第二回は戦争に巻き込まれていく時代が、暗い影を落としている。父平造と叔父竜造の出征、病弱な兄の死、大空襲の惨禍（さんか）。燃え続ける下町を眺める寅次郎には、少年ながらも現実をありのままに見ようとする意識が目覚めている。

その一方で、御前様の娘冬子が少女として登場する。照れくさくて笑ってしまう少年の姿は、後年の寅次郎と変わらない。初恋の相手も現れたことで、恋愛遍歴への伏線も張られている。

第三回では戦争が終わり、父平造が戻ってくる。しかし、戦

地で子供を殺したらしく、さくらの姿に脅えている。PTSD（心的外傷後ストレス障害）を患っている。竜造が復員する頃には、戦争の傷も癒えていくのだが。

　すでに『男はつらいよ』の原型はできている。隣には印刷工場もある。タコ社長、桂梅太郎（かつらうめたろう）は、まだ髪の毛ふさふさだが。中学生となった寅次郎は、学校が終わってもすぐに帰宅しない。父平造に嫌われていて、父母の喧嘩や妹が泣き出す原因になると思っているからだ。

　印刷工場に勤める少女に、寅次郎は恋心を抱く。しかし、少女はうなぎ屋の職人に恋をしていて、寅次郎は片思いをしている。その職人は遊び人で、少女は弄（もてあそ）ばれているだけだった。「寅さんのような人を好きになればよかった」と言われながら

も、少女の帰郷で寅次郎の恋も終わる。

井上優吏（いのうえすぐり）が演じる寅次郎は、学校の勉強ができず、女の子にもてるタイプでもないが、気持ちの優しい少年である。「勉強しないと、寅さんみたいになっちゃうよ」と陰口をきかれても、めげない強さを持っている。

　車寅次郎の映像作品には、テレビ版と映画版の『男はつらいよ』、今回のドラマ『少年寅次郎』がある。細かい点を見ると、人物や舞台の設定に違いが見られる。映画版では昭和十五年の生まれだが、『少年寅次郎』では終戦時に下町が焼ける様子を夜通し見ていたところから、十歳前後になっていたはずである。すると、昭和十年頃の生まれでなければ辻褄（つじつま）が合わない。山田

洋次の原作『悪童』では、昭和十一年の二・二六事件の日の生まれとなっている。寅次郎の実家は当初「とらや」だったが、モデルとなった団子屋が「とらや」と改名したことに憤激した山田洋次監督は、団子屋を「くるまや」と改めた。『少年寅次郎』では当初から「くるまや」の店名が採用されている。

今回、英語教師坪内散歩の娘、夏子が登場する。これは映画版『続・男はつらいよ』の設定と同じだが、テレビ版では坪内冬子となっていた。それはテレビ版では御前様が登場せず、坪内散歩の娘を坪内冬子としていたのが、御前様の姓も坪内で娘の名を坪内冬子としたため、坪内散歩の娘は坪内夏子と改められたのである。

また、『続・男はつらいよ』では、三十代の寅次郎が、夢に

まで見た生母菊と再会するのだが、『少年寅次郎』では初めて再会するのは中学生という設定である。細かい点を見ていくと齟齬（そご）が出てくるのだが、それは気にせずに各作品を楽しめばいいのである。

生母菊と寅次郎の再会の場面は感動的である。思春期の揺れる思い、素直には喜べないが、内心では胸の高鳴りを抑えられない様子が、ごく自然な演技で表現されている。生母菊の不器用な愛情表現と、継母光子の抑制した思いが対照的である。葛藤に苦しむ寅次郎にとって、心の光となるのが坪内散歩の娘夏子である。寅次郎のほのかな恋心を、父平造が踏みつけて、次回の出奔へとつながるのだろう。哀しみ、喜び、憎しみ、甘さと苦みがバランス良く味わえる絶品である。

昭和二十四年、寅次郎は十三歳になっている。坪内夏子が父散歩と喧嘩して、くるまやを訪ねてくる。交際相手のことで父に反対されたからで、寅次郎が片思いのままであることに変わりない。

寅次郎の継母光子は、ずっと腰痛に悩まされていたが、膵臓癌（すいぞうがん）のためであったことが分かる。光子には癌であることは伏せられているのに、泥酔した平造が病院に入り込んで、「死ぬはずない」と大声で叫ぶことで、光子自身に不治の病であることを知らせてしまう。

結局、光子は帰らぬ人となるのだが、真実から逃げ回る平造は家に戻らず、葬儀も弟竜造・つね夫婦が中心となり、喪主が

寅次郎という形で行われる。平造が戻ってきたときには、光子の葬儀はすでに終わっている。

妻が亡くなったことを認めたくない平造は、またもや寅次郎につらく当たる。二人は似た者同士の近親憎悪（ぞうお）の仲であり、光子がいなければ死んでいたんだから、光子に感謝しろと言う平造を、寅次郎は殴り倒して、ついに二十年間戻らぬ長い旅に出るのである。

さくらが柴又駅まで送りに行き、財布からお札を出して兄寅次郎に渡すところは、『男はつらいよ』で毎度目にする別れの場面である。全五回のテレビドラマは、こうして幕を閉じたのである。

あとは、山田洋次監督自身による映画化が望まれるわけだが、

ドラマと違って、一時間半から長くても三時間の枠に収めるには、原作『悪童』のある時期にしぼった映像化しかないだろう。
もし映画化されるなら、寅次郎出奔の経緯に焦点を絞った形で、山田監督の映像世界を見てみたい。

ドラマ少年寅次郎ＳＰ完全版

これは好評だった「少年寅次郎」の、番外編とでもいうべき作品である。脚本は今回も岡田惠和が担当した。実父平造と養母光子との思い出を中心に、前回描ききれなかった部分を表現したという触れ込みである。

テキ屋となった寅次郎は、初恋の相手で印刷工場で働いていたさとこと再会する。山形に戻っていたさとこは、親戚が経営する旅館で働いていた。奇遇を喜ぶ寅次郎だが、さとこが結婚すると聞いて再び失恋、別れ際に渡されたリンゴがきっかけで、寅次郎に忘れがたい記憶がよみがえる。

お供えのリンゴを盗んだことで、母光子に男は堂々としてい

るべきだと諭されたこと、夭折した兄昭一郎や癌で亡くなった母光子に、すりおろしたリンゴを食べさせた思い出などである。

　帰郷した寅次郎は、実家の「くるまや菓子舗」に上がり込み、叔父竜造、叔母つね、妹さくらの話を盗み聞きする。店の前に捨てられていた寅次郎を、子供のいない竜造とつねが養子にしたいと申し出るが、愛着を持ってしまった光子が断ったこと、父平造が亡くなる前に、寅次郎のように旅をしながら人生を送りたかったと漏らしたことなどである。

　寅次郎は仏壇にリンゴを一つ置いて、こっそりと立ち去る。それに気づいてさくらは追うが、寅次郎は茂みに姿を隠している。そのままふたたび旅に出ると、旅先で第二の恋人坪内夏子と再会するという流れである。

　前回は全五回で放送されたが、今回は二回分の長さである。一つのエピソードを深める余裕はなく、時間系列が前後して展開するので、物語の中に没入することは難しい。ただ、全五回を鑑賞した視聴者にとっては、懐かしい人々との再会が楽しめるひとときとなった。

「贋作　男はつらいよ　大阪の寅やん」

山田洋次監督が『男はつらいよ』の舞台を、東京の葛飾柴又から、東大阪の石切（いしきり）に移し、登場人物や団子屋「くるまや」のセットはそのままに、パロディーを作ってみたという趣向。贋作（がんさく）といっても、原作脚本は山田洋次である。パロディーなら、本物とどこをずらしているかが見どころになる。東京と大阪では風俗や人情も異なるだろうし。

このドラマを十分に楽しむためには、本物の映画を見ておいた方がいい。『男はつらいよ』の第九作に「柴又慕情」があるが、贋作はそれが下地になっている。本物では金沢を旅していた女三人組の中に、気難しい小説家の父を持つ歌子が出てくる。

一方、贋作では箱根を旅していた歌子たちが、箱根で番頭をしていた寅次郎と親しくなり、石切に帰郷した寅次郎と再会する流れとなる。

大きな違いと言えば、本物では二十年ぶりに帰郷して、妹さくらと博の結婚に立ち会うという設定だったが、贋作では三十五年ぶりの帰郷となり、さくらはすでに博と結婚して、満男も生まれている。贋作で寅次郎を演じる桂雀々（かつらじゃくじゃく）が、本職は落語家ということもあり、出奔後に落語の修業をしたものの、逃げ出してテキ屋となったという話になっている。顔が四角いところは、渥美清とよく似ており、落語家ということで、語り口にも独特の味がある。ただ、本物の寅次郎が持っていた極道の雰囲気が欠けている。

寅次郎の帰郷と、歌子たちとの出会いをぶつけたために、本物の映画を見ていない者にとっては、何とも慌ただしい筋書きとなっている。しかも、一回の放送が五十分に限られているので、各人物を掘り下げて描く余裕がない。そのため、本物に登場した俳優の演技がいかに素晴らしかったかということを、改めて感じさせられた。

本物の歌子は吉永小百合が熱演したが、贋作では松下奈緒（まつしたなお）が演じている。どちらの女優も匂い立つような雰囲気があるので、次作で松下がどのような演技を見せてくれるか楽しみである。

「贋作　男はつらいよ　石切慕情」

題名を見れば分かるように、これは「柴又慕情」のパロディーである。前回、箱根で知り合った歌子が「くるまや」にやってきた。これは箱根で寅次郎に頼まれた、さくらへの「結婚祝い」のご祝儀を渡すためである。

ようやく贋作のスタッフも波に乗ったようである。歌子の来訪に上機嫌の寅次郎は、皆の前で落語の腕前を披露する。江戸落語が旦那衆へのお座敷芸で始まったのに対し、上方落語が大道芸から始まったということを、乗りに乗った話芸でまくし立てる。一同は目を丸くして喝采（かっさい）する。歌子を演じた松下奈緒の、訴えるようなまなざしが魅力的だった。

「寅さんは落語家になればよかったのに」と歌子は言うのだが、贋作の寅次郎を演じる桂雀々は、本業が落語家である。本物の寅次郎を演じた渥美清が、テキ屋の口上に長けていたのも、若い頃にテキ屋をやっていたからである。

歌子の悩みは、小説家の父が歌子の結婚に反対していること、結婚したらお茶も入れられない偏屈な父が、一人取り残されてしまうということである。そんな悩みも知らない寅次郎は、歌子が遊びに来てくれないので、二階にこもったままため息ばかりついている。そのさまをおちょくったタコ社長と、寅次郎の取っ組み合いが始まり、本物の名場面が再現される。

本物と同じように、寅次郎は歌子の父に会いに行く。大喧嘩して憂さ晴らしに酒を飲んで帰ると、歌子が昼間の父の無礼を

許してくれと、「くるまや」を訪ねてきたと知らされる。余りに悲しそうな歌子を、さくらが自宅に連れていったと聞いた寅次郎は、自分の前で話せないのは、自分が歌子の恋の当事者だからだと思い込む。

ただ、五十分の枠の中なので、粗筋ですっ飛ばすように、物語は決着する。寅次郎は歌子の結婚したい相手が自分ではないことを知る。歌子の結婚を許した小説家の父が、寅次郎に礼を言うために、「くるまや」にやってくる。戻ってきた寅次郎が、歌子の父と石切神社に参拝するという流れである。

まあ、「柴又慕情」のパロディーなんだから、本物を見ていない視聴者には、話の展開が早すぎるし、そうした視聴者を対象には、もともと作られていないということだろう。

「贋作　男はつらいよ　寅やん、京都へ行く」

これは「男はつらいよ　寅次郎夕焼け小焼け」のパロディーである。寅次郎が酒を飲んでいると、みすぼらしい和服姿の老人が、無銭飲食で警察に突き出されそうになっている。働いて少し金のあった寅次郎は、老人の飲食代を払ってやる。

老人の求めるままに、はしご酒をさせられた寅次郎は、深夜に「くるまや」に老人を連れてくる。タクシー代までは持っていなかったので、おいちゃんに払ってもらうことになる。

この老人は寝坊して「朝飯はどうなってる」と言い、朝風呂に迎え酒まで要求する。余りの厚かましさに文句を言うと、「ここは宿屋ではないのか」と洩らす始末。お礼に描いてもらった

絵が、二十万で売れたのを知り、「情けは人のためならず」と得意顔の寅次郎。ホームレスだと思った老人は、池内青観（いけのうちせいかん）という日本画の大家（たいか）だったのだ。

ところが、人助けをしたのに、そんな大金を受け取るわけにはいかないと、さくらに諭され、寅次郎はしぶしぶ、お金を返しに京都の青観の屋敷に向かう。受け取りを拒んだ青観は、祇園（ぎおん）で芸者遊びをしようと言い出す。これが芸者のぼたんと寅次郎の出会いとなる。

本物と贋作は設定がかなり似ている。青観の描いた絵が、本物では七万円、贋作では二十万円で売れる。これには物価の変動が反映している。本物では青観のお供をして、播州龍野でぼたんと出会うのだが、贋作ではぼたんが京都の芸者という設定

にすることで、話をコンパクトにまとめている。

「贋作　男はつらいよ　夕焼けの寅やん」

本物での芸者ぼたんは、太地喜和子が演じたが、贋作では田端智子(たばたともこ)の配役となっている。歌麿の浮世絵に出てきそうな美人に対し、田端は朝ドラ『私の青空』で、逃げ出した新郎を、花嫁姿で追いかけ回すヒロインという印象が強い。東北の娘というイメージだったが、田端自身は京都生まれなので、祇園の芸者という設定の方が、むしろふさわしいのだろう。

物語の筋は「男はつらいよ　寅次郎夕焼け小焼け」にかなり忠実である。寅次郎と親しくなったぼたんは、金銭上のトラブルに巻き込まれていた。うまい投資の話に乗せられ、こつこつ貯めた四百万円を、奪い取られたのである。しかも、話を勧め

た社長は、投資先が倒産したんだから、自分も被害者だという一点張り。
　そこで、タコ社長がボタンの付き添いをして、投資を勧めた相手と交渉するのだが、マンションや店舗は、妻や兄弟の名義なので、一銭も払えないという。役に立てずに戻ってきたタコ社長に寅次郎は激怒し、落とし前を付けてやるといきり立って飛び出す。ようやく極道の寅次郎らしくなる。その姿にぼたんはうれし泣きする。
　ただ、寅次郎は騙した相手役には出会えず、日本画家の池内青観に、絵を描いて売り、ぼたんを助けてほしいと言いにいく。金のために絵は描けないと断る青観に、寅次郎は暴言を吐くことしかできない。結局、何もできなずにさくらに見送られ、石

切から近鉄奈良線に乗って旅に出る。柴又から京成金町線に乗るように。
　後日、寅次郎は芸者をやめたぼたんとぱったり出会う。老人のデイサービスをする施設で、ヘルパーとして働くぼたんは、青観に贈られたぼたんの母の絵を、寅次郎に見せる。願いを聞いてくれた青観の住む京都に向かって、寅次郎は合掌してお辞儀をする。本物とほとんど同じ結末である。
　最終回になって、贋作のスタッフも本領を発揮したわけだが、僕は東京近郊の出身なので、江戸弁でまくし立てる車寅次郎と、下町のおいちゃん、おばちゃんの世界の方がしっくりくる。同じ日本でも舞台は現在の大阪であり、昭和時代の東京のような懐かしさはない。

葛飾柴又帝釈天

葛飾柴又は東京の東部で、早稲田辺りからでも一時間かかる。押上に出てから京成押上線で青砥（あおと）に出て、高砂（たかさご）で金町線（かなまちせん）に乗り換え、一駅で柴又に着く。かつてここは江戸のある武蔵国（むさしのくに）ではなく、下総国（しもうさのくに）葛飾郡に属していた。

山田洋次の映画『男はつらいよ』の舞台である。僕は四半世紀ぶりに訪れた。駅前にはかつてなかった、車寅次郎と妹さくらの像が立っていた。その先はすぐに柴又帝釈天、正式には経栄山（きょうえいざん）題経寺の参道である。映画でよく見た風景である。

右手には「とらや」がある。寅次郎の実家という設定で、当初は映画の撮影に使われたが、五作目以降はスタジオでの撮影

に切り替えられた。さくらの夫、博が勤める印刷所は現実には存在しない。今回は足を運べなかったが、「葛飾柴又寅さん記念館」には撮影に使われたスタジオセットが再現されている。

参道を歩いてみたが、思ったほど広くない。団子屋や佃煮屋（つくだにや）、土産店が軒を連ねた正面に、柴又帝釈天がある。二天門をくぐって帝釈堂が見えるが、これも映画の冒頭におけるワンショットである。帝釈天が祀られているわけだが、日蓮宗（にちれんしゅう）の寺院であるから、隣の祖師堂（そしどう）の大曼荼羅（だいまんだら）が本尊である。奥には邃渓園（すいけいえん）と呼ばれる見事な庭園がある。

平日の午後だったので、参拝客の姿はまばらだった。二天門を撮影していると、参拝に訪れた婦人に声をかけられた。

「今日は写真を撮るのにはいいわね。人の姿が写らないから。

寅さん記念館にも行ったけど、すいていたから三時間ぐらい見てしまったわ」

「徹子の部屋」に出演した山田洋次監督

たまたま「徹子の部屋」を見ていたら、山田洋次監督がゲストとして出演していた。もう八十八歳だというが、まだまだお元気という様子だった。

　この時期にゲストとして呼ばれたのは、「男はつらいよ　お帰り　寅さん」が年末に封切りされるからだ。山田監督は渥美清の思い出を語っていた。体調が悪く、撮影が終わると、ずっとつらそうに横になっていたのに、黒柳徹子が現れ、「最近、どうして連絡くれないの？　温泉に女でも連れていってたんじゃないの？」と軽口を飛ばすと、急に機嫌が良くなり笑っていた。本人は病院通いでつらかったのに、そんなことに気づかず、

いたわらない黒柳徹子の態度に、元気づけられたのだろうと語っていた。

山田監督は黒柳徹子を最終作のヒロインと考えていたが、その前に渥美清が亡くなったために、幻の映画となってしまった。黒柳徹子を脇役に出すなんてもったいない、とっておきのヒロインにしようとしていたんだと洩らしていた。

ドラマに登場したヒロイン、吉永小百合や京マチ子、浅丘ルリ子の姿、柴又のおいちゃんの家での一悶着（ひともんちゃく）を見ると、懐かしさがこみ上げてきた。何かいやなことがあっても、この家に戻ってくれば、些細（ささい）なことなどどうでも良くなってしまう。そういう温かさが『男はつらいよ』にはあった。

「あと何作、映画を作られるんですか」という問いに、あと一

つか二つかなと、山田監督は答えていた。車寅次郎の少年時代を描いた小説『悪童』は、最近NHKでドラマ化されたが、監督自身の手で、ぜひ映画化してもらいたいと改めて思った。